

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：逆転の発想でまちおこし



2001・4

特集

逆転の発想でまちおこし

目次

今なお学ぶべきカソサカ十カ条 宮口侗迪(早稲田大学教授).....	4
たこあげが風力エネルギーの原動力に 小澤哲也(北海道苫前町企画振興課係長).....	8
全国方言大会が町の広告塔に 菅原雄一(三川トピア創造委員会委員長).....	10
2万人の市民が三日間避難できる広場 江口徹(神奈川県厚木市防災公園担当課長).....	12
あなたもいつとき田舎人に 佐藤仁(新潟県松之山町振興課地域振興係).....	14
学術的に価値の高い地震断層が出現 島田数雄(岐阜県稲尾村教育長).....	16
88キ、標高差800メートルと極限の闘い 吉村松雄(兵庫県村岡町企画振興課主査).....	18
こだわった「東京にできない」もの 杉谷謙三(広島県総務課長).....	20
生徒会役員が保護者にパソコン伝授 近藤亮樹(高知市立城北中学校教頭).....	28
全国トップクラスのドライバーが参加「ひえつきラリー」 尾前広史(宮崎県椎葉村企画開発課商工観光係長).....	30
「わがまちづくり支援事業」推進に尽力を 片山虎之助(総務大臣).....	3
「ミーム」.....	22
きものをつくって考えたこと 後藤新(群馬県商工労働部長).....	27
活発な男女共同参画条例づくり 有馬真喜子(フォーラムよこはま館長).....	27
デジタル・ミュージアム構想の推進について 総務省自治行政局地域情報政策室.....	32
注目浴びる日本一小さな町 松尾和敏(長崎県高島町建設産業課長).....	35
身近な地域から「福祉文化」の創造を 有賀正(長野県松本市長).....	36
地域づくり団体全国研修交流会.....	38
津山・城西まると博物館フェア実行委員会 岡山県津山市.....	40
ゆげ女性塾・愛媛県弓削町.....	42
第12期生、30人巣立つ.....	44
地域だより/センター通信.....	45・46
逆転の発想でまちおこし.....	47・48



●大島の椿祭り(東京・大島町)
「御神火様」の三原山で知られる伊豆大島で恒例の椿祭りが行われた。三原山は十五年前、二百年ぶりに大噴火、世界三大活動性火山の一つとして有名だ。

温暖な気候に恵まれ、一年を通じて花を楽しむことができる。中でも見ものはツバキ。町のいたる所

にヤブツバキが自生し、その数は三百五十万本にも上る。花盛りの一月下旬から三月下旬にかけ椿祭りが行われた。今年で四十六回目。

期間中、メイン会場の大島公園では、あんどさんによる民謡、手踊りなどのアトラクションや撮影会、ツバキの花びら染め体験教室、カメラアマゾンも行われた。また椿園には五百種類の園芸品種が咲いており、その規模は日本一。

観光客はピーク時の昭和四十九年には二十万人を超えたが今はその半数。町観光協会の鏡神介事務局長は「昨年から落ち込みが目立つ。三宅島の噴火が景気の影響なのかならないか」と話す。●ペンリやなぎ●カメラリ小形又男

強風を逆に発電で再生＝北海道苫前町

農業、漁業の町に町営、民間による風力発電所がつくられた。
このうち民間2社の発電出力は5万600kWと日本一の規模を誇る。



逆転の発想でまちおこし

冬寒ければ暖かくするのが常識。その寒さを利用してイベントを行うのが逆転の発想。

道路が悪ければ舗装するのが当たり前だが、

悪路をオフロードラリーのコースにしてテクニックを競う、これもまた逆転の発想である。

意外性、特異性が評価されるのも時代の流れかもしれない。

自治体でもこうした発想で地域づくりに取り組んでいるところがある。そんな事例を紹介したい。



豪雪と仲良く＝新潟県松之山町

過疎と豪雪に悩む町は、冬、夏にイベントを開催。
とくに夏は帰省客も参加できるよう雪上網引き、
早飲みリレーなど雪の感触を楽しめる。



防災公園に变身＝神奈川県厚木市

防災公園は備蓄倉庫、飲料用貯水槽、非常用トイレなどを完備。子供たちに人気のある遊びの池は、いざというとき防火、生活用水に。



過酷なマラソンレース＝兵庫県村岡町

総延長88km、標高差800mと過酷なレースが午前5時半スタート。13時間以上も走り続けたランナーがゴール。日はとっぴりと暮れている。



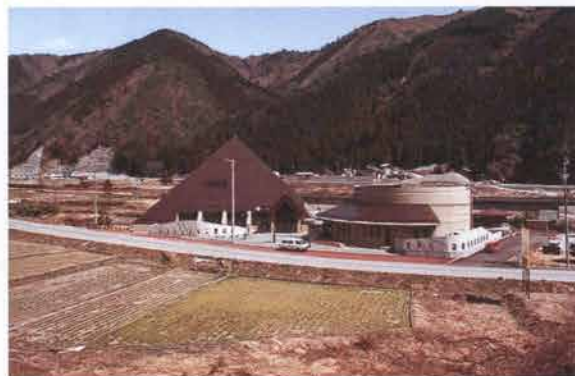
親子逆転体験＝高知県高知市

生徒が先生役となって教えるパソコン講座。生徒会のつくった操作マニュアルを参考にはがきづくりに取り組む。



方言でアピール＝山形県三川町

恥ずかしいと年々使われなくなる方言。そうした中、庄内弁にヒントを得て全国方言大会を開いたところ大好評。



地震を自信に＝岐阜県根尾村

村が壊滅的被害に遭った濃尾地震。この際できた断層は世界的に有名になり、天然記念物に。風化を防ぐため地震断層観察館を設置。



過疎を逆手にとる会＝広島県総領町

「東京にできない」ものにこだわった逆手塾。作家の永六輔さんは会の応援団として十数回、総領町に足を運び激励。



悪路日本一を逆手に＝宮崎県椎葉村

全日本ラリー選手権のうち1戦が悪路だらけの村道。林道を使用して繰り広げられる。例年の出場は50～60台。戦いは迫力満点。



片山虎之助 総務大臣

「わがまちづくり支援事業」推進に尽力を

今回の中央省庁等改革は、二十一世紀型行政システムへの転換、言い換えますと、新しい日本のあり方に合わせた行政体制をつくるということ、そして、より個人を尊重した公正な社会を形成するために行われたものであります。

総務省は、行政組織、公務員制度、地方行政財政情報通信、郵政事業、消防防災など、国家の基本的仕組みにかかわる諸制度、国民の経済・社会活動を支える基本的システムを所管し、国民生活の基盤に広くかかわる行政組織を担うものであり、私としては、このような機能を担う総務省が、国民との接点を大切に、旧総務庁、郵政省、自治省という三省庁統合の成果を国民の皆様に理解していただけるよう、「融和」と「結束」という考え方に立って、所管行政の推進に努めてまいります。

また、わが国経済の新たな発展の道筋をつくり、「日本新生」を図っていくため、三省庁統合の機能を生かし、行政改革の推進、地方分権の推進、IT社会の構築などに最大限の努力を払ってまいりたいと考えております。

さて、全国各地においては、少子・高齢化、国際化、高度情報化など新しい時代の到来に対応すべく、

それぞれの地域が持っている自然、歴史、伝統、文化、産業といった地域特性を生かした地域づくりに真剣に取り組んでおられると思います。

私は、かねてより住みよく愛着を持てる地域づくりを進めていくためには、住民の方々と合意形成、協同活動が不可欠であり、より良いパートナーシップのもとに、行政の押し付けではなく、住民参加型の行政システムを構築することが大事であると考えております。また、役割分担を明確にし、民間や地方公共団体の力をいかに引き出し、地域の活力を生み出す大きなポイントであると考えております。

このためには、地域の自立促進を図り、地域社会を個性豊かで活力あふれるものとし、快適・安心な暮らしを実現していくことが必要であり、地域の活力創出、自主的・主体的な地域づくり、国土保全対策、少子・高齢化などに対応した総合的な地域福祉施策の展開、循環型社会の形成の推進などの重要な課題に地方公共団体が積極的に対応していけるよう支援してまいります。

また、住民が中心となって考え、住民と行政が役割を分担して行う地域づくりを推進するため、平成十三年度からの新規施策として「わがまちづくり支

援事業」を推進していくこととしております。

この事業は、分権型社会における地域づくりには、これまで以上に住民の方々が主体的に参加し積極的役割を担うことが求められており、このため、住民の方々が中心となって考え、住民の方々と行政が役割を分担して行う地域づくりを積極的に進めるための住民の方々による話し合いの場づくりやその結果を受けた取り組みについて、市町村が行う支援を「わがまちづくり支援事業」として財政面でバックアップしようとするものであります。

「わがまちづくり事業」を全国的な事業として盛り上げていくために、地域活性化センターとの連携により各種事業を推進していくこととしていますので、地域づくりに携わる皆様方におかれても、ぜひこの事業の推進に向けてご尽力いただきたいと思います。これからは、人、金、物、情報をうまく組み合わせ、その上に住民の心（ハート）を一つにして、元気あふれる個性的なまちづくりを進め、質量ともに豊かな生活が実感でき、誇りや愛着を持てるわが市、わが町、わが村を築き上げていくことができるよう全力を傾注してまいりますので、皆さんのご協力をお願いいたします。

逆転の発想が当たり前の時代

普遍化で魅力失われることも 今なお学ぶべきカソサカ十力条



宮口 侗迪
早稲田大学教授

急速に進んだ画一的な都市化

逆転の発想という言葉は、世間の多くが同じ方向を向いているときに、あるいは同じやり方でものを進めているときに、それを当たり前としないで、それとは正反対

のやり方が意外に成功をもたらすことを期待して生まれたものである。しからば、この日本においてどんなことが当たり前であったのであろうか。

わが国は、もともとみんなが同じになろうとしてきた長い歩みを持つている。その一つは、有史以前からといってよい、信じられないくらい長い水田化の歩みである。水田による米づくりが伝えられてから、適地はもとより、適さない場所にまで、大変な努力を重ねて水田を造成してきた。地形をいわず斜面に棚田を作り、ヤマセの吹く東北地方の東側

や、ついには北海道にまで、気候をも克服して稲作を実現してきた。サンゴ礁の世界である沖縄と、近代以降の移住社会である北海道を別にすれば、きわめて早くから、類似した集落単位の農村社会が存在し続けてきたのである。

もう一つは、二十世紀に進んだ、工業化・都市化の流れである。わが国の二十世紀は、ひとことと言うと、都市化の時代であった。明治三十四年に官営八幡製鉄所がつくられたことは、わが国の二十世紀が産業革命と共に始まったことの象徴である。大きな工場に多くの人が集まり、決まった作業に従事することが社会を引っ張ってきた。工業の成長は、全国に同じような都市を多くつくり出した。この間のわが国の人口増加はそのまま都市人口の増加であったが、まだこの時代には農村はしっかりと受け継がれ、いわば都市の成長

と農村の継承の時代が続いていた。

そして二十世紀の中盤を過ぎて高度成長期に入ると、都市化がまさに画一的な形で急速に進んだ。企業は大きくなることを競い、すべてにわたって大きさによる序列がつけられるようになっていった。大きいことはいいとだという発想が幅を利かせ、ついには経済大国という呼び名すら生まれた。都市の驚異的な経済成長は、都市に行きさえすれば仕事にありつけるという状況をつくり出し、農村を受け継ぐはずの人までが都市から帰らなくなった。

この結果、成長を続ける都市地域の対極に、面的には広大な過疎地域と呼ばれる人口減少地域が発生した。このような展開の中で、都市自体がどのくらい大きいのか、あるいは大きな都市からどの程度の距離にあるかという、まさに成長する都市を中心にした画一的な

のさしが定着していった。この状況の中で、ついに水田を減らす政策が導入され、過疎地域のための特別措置法が制定されたが、このような展開の中では、地域の違いは格差としてのみ認識されるようになっていった。これが二十世紀に生まれた、わが国の画一化への流れの帰結であった。

マイナス面にも価値が

しかし、違いが格差としてのみ認識されていく過程で、二十世紀終盤に至って、一見マイナスであると思われる状況に価値があるのではないかという発想が、ようやく生まれてきた。これがまさに逆転の発想である。冬になると、日本海側では雪が降り、太平洋側では晴天が続く。この大きな違いが生ずることは、今はだれ一人知らぬものはない。しかし、この違いは、暮らし方の本質にあまりかわつてはこなかった。わが国の農村の多くは米づくりをベースにしてきたため、生活は夏の暑さを前提に組み立てられ、冬の違いを大きく反映するものにはならなかった。これが、九州から東北までの、日本の農村が同じような風景を持っている理由である。雪は尽きることはない水をもたらし、くれることで、大いに日本海側の農業に役立ったものの、表立った資源として意識されたことはな



2001年札幌の雪祭り

雪を活用した北海道・東北

く、逆に生活の都市化の中で雪は邪魔者にされていった。

こ

の雪を資源として、初めて大々的に活用したのが、札幌の雪祭りであろう。

いまや定番のイベントとして名高いものになったが、北陸や東北の雪国の多くが雪を邪魔者とし、意識しなくなる時代に、雪を活用したイベントを考え出し、きわめて多くの観光客を呼ぶことに成功したことは、当時として

はまさに輝かしい逆転の発想であった。

北海道はそもそも新しい移住社会で、過去にとらわれず単純明快に現実と直面してきた地域であり、二重窓や大型ストロブの普及など、寒さにも素直に対応してきた。逆に本州の米どころの雪国では、暖房に力を注がず、寒さにひたすら耐え、ただ春をのみ待ちわびてきたところがある。その北海道で、目の前にある雪を資源として活用するイベントが生まれたのは、逆転の発想というよりは、素直なオリジナリティによるものと位置づけるのが妥当かもしれない。

とすれば、一見逆転の発想であることが、本質的には当たり前のことになり得るということになる。それまで、その地域がいかなる点で他と本質的に異なっているかということから出発しないで、安易に周りの流れに流されていた状況がわが国には多かった。そして、逆転の発想で地域を方向づけるということが、その地域がほかと違う本質を持っていることに基づくならば、それは結局、違いの中にどんな価値があるかをしっかりと見極めて、安易に世間の大きな動きに流されないで、独自の道を模索するというところに落ち着くのではあるまいか。

すなわち、地域の違いを大切にすることなく画一的な方向を考えてきたことからの脱皮

然別湖の氷上露天風呂＝北海道鹿追町



が、逆転の発想という魅力ある表現をとってあらわれたと理解できるということである。したがって、素晴らしい逆転の発想も、いずれ普遍化されていくものでもある。

えられなかったことであり、いまや逆転の発想は当たり前になってしまった。その中で価値を持続するためには、改めて、その中で新たな逆転の発想が求められるのかもしれない

その後、雪国の自治体は競ってスキー場を建設し、雪祭りをやるようになった。新潟県の安塚町は、昭和六十二年の二月に大量の雪を運び、ヘサヨウナラ後楽園球場スノーフェスティバルを敢行してその名を高らしめたが、今はもう雪国で雪に関するイベントをやらない地域はないといつてよい。しかしそれが普遍化すると次第に模倣が重なり、マンネリ化し、逆転の発想という新鮮な魅力は失われていくってしまう。

北海道では、鹿追町・然別湖の氷上の露天風呂、下川町の氷のキャンドル、早来町の雪だるま小包、陸別町のしばれフェスティバルなど、雪や寒さを逆手にとった仕掛けやイベントが目白押しである。

こんなことは二十年前には考えられなかったことであり、いまや逆転の発想は当たり前になってしまった。その中で価値を持続するためには、改めて、その中で新たな逆転の発想が求められるのかもしれない

い。

一世を風びたカソサカ

大成長がキーワードの時代に、逆転の発想という言葉がささやかになかったわけではない。また、「小さくてキラリと光る国」という主張があったこともある。おそらく数ある企業の中には、世の中の流れと逆のチャレンジで成功した例もあったはずである。しかし地域ないしは自治体のレベルでは、そのことはなかなか本音としては受け止められなかった。四十五年に最初の過疎法（過疎地域対策緊急措置法）がつくられて以降、その投資の大半は道路整備と公共建築に使われた。これは過疎地域の取り組みが、都市との格差是正という単純な発想に基づいていたからにはかならない。

この時代、逆転の発想を世に問うた代表的なものとして、〈過疎を逆手にとる会〉（通称カソサカ）の十カ条がある。これは基本的に、人口の少ない小さな村に魅力ある可能性があることを謳ったもので、一世を風びた偉大な主張であったのだが、残念ながら多くの過疎自治体の指導者たちが本音でこれをよりどころにしたわけではない。むしろ都会の識者たちの、田舎にも骨のある連中がいるという理解を得て、盛んな都市農村交流を喚起した

ところの意味があつたかもしれない。そういう点からすると、カソサカ十カ条は、いままお逆転の発想として学ばれてよい。

この逆転の発想もまた、原理を突き詰めてみると、筆者には当たり前のことだと思えてしまう。都市の成長がこれほど順調であつたために、わが国では人口増加イコール発展だという発想が染み付いてしまった。その中で、人口が減つても発展的な状況をつくり出すことができるに違いないと考えることは、確かに逆転の発想であつたかもしれない。しかし、都市的な発展の原理と農山村の発展の原理がもともと違うものであると考えれば、過疎地域の発展に都市とは違う考え方を出发点とすることはむしろ当たり前のことである。したがってここでも逆転の発想がむしろ当たり前なのではないかと思ふ。

普遍化された五番目の全総計画

このような発想は、五番目の全総計画を考へるに当たつて、ようやく少し普遍化された。五全総とは言わずに「二十一世紀の国土のグランドデザイン」という正式名称となつた新しい国土計画では、筆者らの主張もあつて、「多自然居住地域の創造」という大きな戦略が掲げられた。これは、都市の拡大成長がそろそろ限界という時代にあつて、県

庁所在地などの中枢・中核都市から遠距離にある小都市や農山村が、従来の拡大成長路線とは違つた発展の型をつくり出すことを主張したものである。

そこでは、人口増加を前提にしないで、土地・資源・空間の使い方を発展させることによって、それぞれがレベルの高い生活をつくり出すことが基本になる。農業も林業も、あるいは商業・サービス業も、少数精鋭主義で一人あたりの取り分が多い仕組みをつくることができるれば、数を頼みとしない生活が可能にならずであり、これが過疎地域の活性化の原理になる。先のカソサカ十カ条はあまり経済や産業に触れていないが、結果的に人口が減つても、人や企業が生き生きと活動できていればそれは発展的な状況である。人口減少時代にあつては、このような一見逆転の発想が、逆に普遍的な原理になつて、少しもおかしく

はない。基本は違いの中に価値を見だし、そこから出発することである。

個性あるまちづくりを

地

方の小都市にも、キラリと光る魅力を目指すというところが増えた。これも、かつての逆転の発想が、学習によって普遍化されてきた例であろう。長いこと同じ世間並みを追求してきたわが国で、ようやく個性というものが理解され始めた感がある。実際、高度成長期の画一化の中で独自の文化を持ちこたえたところは、今、あらためて大変な評価を受けているところが多い。

いまやまちづくりにおいて、逆転の発想は常識化しつつあるのではないだろうか。それは、まちづくりが、意味のある個性を主張するものだからであろう。ほかとの違いに立脚してその個性を伸ばそうとすれば、どこかで世間の流れに抗しようとする発想は必然である。しかしひとたび逆転の発想で仕組みをつくつても、奇をてらつた珍しさしかなければ、それが世に普遍化されれば力を失つてしまう。そのときに、その個性が、自分たちが真にその価値を感じ、充実感と幸福感をもつてつきあえる、現代に通用するものになつていくかが、その仕組みの持続性を決定するのではあるまいか。

国土交通省国土政策研究所編
21世紀の国土のグランドデザイン
創造

「21世紀の国土の
グランドデザイン」
戦略推進指針

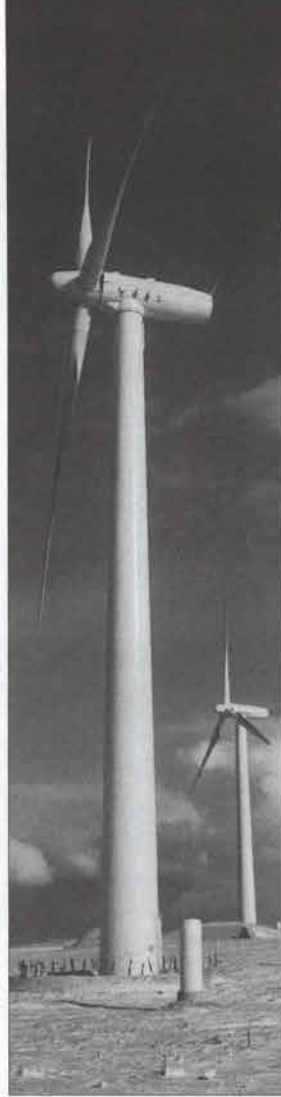
逆転神

の発想でまちおこし

風車のまち

北海道苫前町

たこあげが風力エネルギーの原動力に 官民一体で活性化に取り組む



夕陽ヶ丘ウインドファーム・風来望



苫前町企画振興課係長
小澤哲也

層深め、風は地域の財産であることを再認識することとなった。

着眼点が合致した行政と住民

この強い風を「風力エネルギー」として生かすため、行政側も調査や検討に積極的に取り組み、その可能性を探る風況調査の実施に向け関係機関に働き掛けを行ってきた。

一方、住民の発想によるまちづくりの意見を行政に生かそうと六十三年五月、「まちおこし協議会」が設立された。各町内会（自治会）の代表らで組織された同協議会は地域や業種を超えた発想の下、行政全般にわたるまちづくりに積極的にかかわっている。全体会議を重ねるなか、これまで数回にわたりその検討結果を行政側に提言してきた。このうち平成七年八月には、環境問題に配慮した「風を活用した自然エネルギーの導入」についてと題する提言を行った。つまり風力発電施設建設事業への積極的な取り組みで、まちのイメージづくりにつなげてほしいという内容だ。

このように行政と地域住民とが着眼点を合致させたことで、「風力エネルギー」の調査活

苫前町は、北海道の日本海北西部に位置し、人口約四千五百人の稲作やメロンなどのそ菜を中心とした農業と、ホタテ養殖や甘エビを中心とした漁業の町である。

当地では往時から、冬期にかけ当たり前のように吹き荒れる強風という「厄介者」を地域の大きな財産と再認識し、プラスとなり得る風力発電事業への可能性を探る取り組みを住民とともに推進してきた。そのことで、行政と住民との距離感や温度差を特別に意識することなく、風力エネルギー展開の大きな原動力となったと考えている。

風は地域の財産

当

町は、明治初期からニシン漁でにぎわいを見せ、これに従事するため青森地

動を加速度的に推進することができた。

町は住民との一体感を肌で感じ、町内の夕陽ヶ丘地区や上平グリーンヒル地区で、それぞれ二カ年にわたり風況調査などを実施した。

この調査結果データを基に夕陽ヶ丘地区では、町営風車機三基総発電出力二千二百キロワット（六百キロワット機二基・一千キロワット機一基）規模の風力発電施設を九年度から十二年度にかけて建設した。この風力発電施設を「夕陽ヶ丘ウインドファーム・風来望」と名付け、未来に向かう住民の希望と想いを風車に込めた。発電電力は風車のライトアップや同施設内の消費電力に活用するほか、余剰電力を電力会社との専用線により売電している。また、訪れる住民や観光客に、自然再生エネルギーに対する理解や意義が深められるような啓発活動を念頭に、同施設周辺の公園化を図るなど、環境と調和したクリーンエネルギーの在り方を体感できるシステムづくりを検討・計画している。

日本一のウインドファームが完成

一方、上平グリーンヒル地区では民間企業二社による総発電出力五万六千キロワットに及ぶ日本一の集合型大規模風力発電施設（ウインドファーム）風の牧場が十二年十二月にすべて完成した。

同地区には町営牧場用地約三百畝があり、町内の酪農家などから受託した育成牛を放牧

したり、採草地として利用している。

同地区で総発電出力二万キロワットの風力発電施設建設を計画した総合商社トーマスは、同プロジェクトの事業主体となる現地法人「トーマンパワー苫前」を設立し、十一年十一月までに、約百畝の牧場敷地をエリアに風車機一千キロワット級二十基を配置したほか、変電所や航空障害塔などを設置し、同敷地内を南北に縦断する電力会社の送電線（六万六千V）に系統連系した。

また、電源開発を中心とするグループも総

発電出力三万六千キロワットの風力発電施設を建設するため、事業主体となる現地法人「ドリームアップ苫前」（苫前町、電源開発、オリックス、カナモトの四者出資）を設立した。

同 事業は、風車建設位置の調査や基数の検討をコンピュータ処理による風力発生シミュレーションを駆使した分析に基づいて行い、単機出力で日本最大級となる千六百五十キロワット級と千五百キロワット級の風車機（十九基）が建設され、昨年十二月一日運転がスタートした。

この上平グリーンヒル地区をフィールドに民間二社によるウインドファームが完成したことで、年間予想発電電力量は平均的な一般家庭が使用する年間電力消費量に換算すると、約三万一千戸に相当する。

当町は、住民との共同作業で完成させた「夕陽ヶ丘ウインドファーム・風来望」という特色ある独自の風力発電施設とともに、上平グリーンヒル地区での商業ベースによる集合型大規模風力発電施設（風の牧場）のように風力発電を基地化した魅力を十分に生かしながら、「風のまち」「風車のまち」をキャッチフレーズに地域活性化につながる「まちづくり」を目指しているところである。

苫前グリーンヒルウインドパーク（1000kW×20基）



ないないずくしから出てきた庄内弁 全国方言大会が町の広告塔に



方言ボウヤの案内看板

言が飛び出した。

この一言が、全国方言大会のきっかけとなり、事態は急展開していった。

賛否両論、さまざまな声が聞かれたが、六十二年八月、「第一回全国方言大会」は司会にNHKアナウンサー、ゲストに津軽弁で有名な伊奈かつぺいさんを迎えて盛大に開催された。

この大会は、当時の「ふるさと文化の見直し（再発見）」の風潮にも乗り、その反響は予想をはるかに上回るもので、マスコミで大きく取り上げられた。大会や三川町が全国に紹介され、「来年もやるのか」という問い合わせが殺到し、国語の教材に採用したいのでテープを送ってほしいという依頼が相次ぐなど、三川町の名を全国に広め、大会は成功を収めた。

生まれた**全国交流ネットワーク**

これまで開催されてきた全国方言大会は十四回。バスガイドによる方言観光案内、北前船の探求、食文化とお雑煮、衣装、

天気、昔ながらの遊び、クイズ大会、民話の



三川トピア創造委員会委員長
菅原雄一

夕べなどさまざまなテーマ・手法を駆使して開催され、方言との関連性、方言の魅力を追求してきた。

昨年の大会は「青春」をテーマに、十六歳〜二十四歳までの今までにない若者による出場者によって構成された。新方言と若者言葉の関連性、その魅力を取り上げた。全国六県からそれぞれ二人の出場者に高校生活を舞台に寸劇を制作してもらい、それを披露していただいた。各地の魅力ある方言や面白い若者言葉を聞くことができた。

このように大会を重ねるごとに、出場者やゲストとの方言を通じた全国的交流ネットワークが生まれてきた。それに、大会開催のたびに町を訪ねてくれる方や、方言（大会）に関心をもって訪ねてくるマスコミも絶えない。また、各地域の文化や人情に接し、感動や驚きを覚えるとともに、三川町のすばらしさも知っていただく機会になっている。「全国方言大会・開催の町」として、方言大会が三川町の広告塔となり三川町の知名度の向上に大きな役割を果たしている。

若者の創造性がきっかけ

日 本有数の穀倉地帯・庄内平野の真ん中に位置する三川町。人口は八千人余り、

総面積三三・二一平方キロの小さな町の基幹産業は、昔ながらの水稻中心の農業である。この町の方言による地域づくりは、昭和六十一年八月に始まった。

二十一世紀のまちづくりに若者の創造性を生かそうとこの年に新たに誕生した三川トピア創造委員会は、地域を活性化させるために、まず町を売り出すことを考えた。何度も集まり、その都度深夜に及ぶ議論を重ねても、最終的な結論は「三川町には何もない」という結論であった。ところが、ある会議の中で、「あるのは庄内米と庄内弁ぐらいだ」という一

特産品の販売促進にもひと役

方

言という切り口での町の特産品開発を考察すると、方言（大会）がもたらした効果は地元産品にも波及している。JAで販売するお米（宝玄米）や地場の枝豆の名前

※全国方言大会。テーマは「天気と方言」



に方言が使われたり、お菓子の名前に方言や大会キャラクターが登場したりと、大会を始めてから方言による特産品の販売促進や開発にもひと役買っている。

全国的に見られるような一般的な観光要素や素材に乏しい三川町にあって「観光」とは生み出すもの、創造するもの以外のなものでもなかった。そこで、三川トピア創造委員会と三川町では、全国方言大会を機会にさまざまな活動を展開してきた。今までの活動は「点」であり、これを「線」そして「面」にしなければ集客（来町者）は望めない。町内でまだだれも見つけられない素材を発掘し、それにユニークな何かを加え、特異性と意外性の両面をもったものに仕上げ、周囲に働き掛けていく。

アイデア駆使した方言活動

三川トピア創造委員会のアイデアによる「方言を介した活動は数多い。『方言ピデオ辞典』は、庄内弁を寸劇にとりまぜ、辞典風に方言を紹介している。委員の自作自演によるもので現在第三巻まで完成している。『方言壁画』は町内の中学校のグラウンド観覧席の壁面に、三川町の四季と大会のイメージキャラクターである方言ボウヤとその家族を描いたものである。

三川トピア創造委員会も町も、地元の方言という素材を生かして、人が集う機会をつく

り、交流を生み、「何かをしよう」という夢づくり、まちづくりをする人を生んできた。そこで生まれた発想やアイデア、夢が魅力的な「まち」をつくり出し、それがまたほかから人びとを呼び寄せ、ここに住む人が生き生きと暮らす、それが「方言」による地域づくりであるといえる。

各地域の特色ある方言を通じ、方言の魅力



宝玄米

のみならず、方言と地域文化との関連性や特性を探る。全国各地の方言とその地域文化を知るなかから、地元の財産（資源）を発見したり再認識し、地域の活性化と地域文化の掘り起こしを目指していく。

今年で全国方言大会は第十五回目という節目の年を迎える、日々挑戦の意欲で取り組んでいきたい。三川町にトピアがある限り、何かが生まれる。

逆転神の発想でまちおこし①

防災公園に変身

神奈川県厚木市

2万人の市民が三日間避難できる広場 災害に強いまちづくりの象徴に



厚木市防災公園担当課長
江口 徹

新宿から電車で約一時間、神奈川県中央

部に位置する厚木市は、人口二十一万七千余。相模川を利用した舟運をはじめ、産業、生産物の交易の場として発達し、江戸時代には、小江戸と呼ばれるほどのにぎわいを見せ、古くから交通の結節点として栄えてきた。

公園建設の契機は阪神大震災

み

その被害をもたらした平成七年一月のあの阪神・淡路大震災は、私たちに

多くの教訓を与えた。

本市では、この年を「防災元年」と位置付け、市民の安全確保を最優先課題とし、「災害に強いまちづくり」を進めてきた。

とくに、東海地震の地震防災対策強化地域に指定され、さらに神奈川県西部地震による被害が予想されるなど、大規模地震などへの対応が強く求められていた中で、阪神・淡路大震災は、「防災公園」建設への大きな契機となった。

「ぼうさいの丘公園」はその名のとおり、備蓄倉庫や飲料用貯水槽、非常用トイレなど、防災施設を備えた公園で、大地震などの災害時には、約二万人の市民が三日間程度過ごす広域避難場所となる。

小田急・本厚木駅周辺の中心市街地から西へ約二キロ、東京農業大学厚木キャンパスに隣接し、周辺に里山の風景を残す小高い丘に、昨年四月オープンした。

面積は約九万二千平方メートル、東京ドームの約二倍の広さがあり、平常時は自然散策や軽スポーツが楽しめる市民の憩いの場となる。

ベンチが非常用トイレに早変わりをし、子供の遊ぶ池や流れの水が生活用水となる。芝生広場の地下には、飲料用の貯水槽が埋設されている。見た目には普通の公園と何ら変わらないこの公園も、災害時の防災拠点として、さまざまな対策が講じられている二面性を持つ公園である。

センター施設は災害時の司令塔

災

害時、司令塔になるのがセンター施設である。現地本部や市の災害対策本部をバックアップする役割を担う。平常時は公園の管理事務所として、来園者が集う。

備蓄倉庫と一体となっており、延べ床面積は二千五百五十九平方メートル、二階建てで、一階の一部分が地中に隠れる「半地下構造」、一階には備蓄倉庫（九百六十平方メートル）があり、乾パンなどの保存食品や毛布、トイレレットペーパーなどの生活必需品、投光器・発電機などの資機材など、公園への避難者その他の指定避難所へのサポート分を併せて備蓄する。

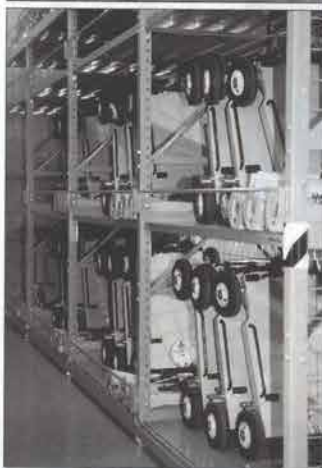
このほか、地域防災無線など非常用通信システムを備えた通信機室、非常用発電機室が



センター施設。前の広場の地下に飲料用貯水槽（100トン）を3基設置

ある。二階はエントランスホールや管理事務室、会議室になっている。災害時は、これら会議室が現地本部や医務室、傷病者の一時休息室（簡易ベッドで約六十床）などになる。そのため、会議室には給排水やガスの設備をしたり、情報提供の場となるエントランスホールの壁面にスポットライトを設置するなど、災害時の対応を考慮した施設整備となっている。

センター施設前の芝生広場には、耐震性貯



センター施設1階の備蓄倉庫。非常用の保存食品、生活必需品、資器材などを備蓄

水槽（百 $\times$ 三基）が埋設してある。流水型で、水道の本管と直結された貯水槽には、常に新鮮な水道水が流れており、地震時の管破裂などによる水圧減で遮断弁が作動し、飲料水が確保される仕組みになっている。この貯水槽により、水がいつも新鮮な状態で確保される。そのほか、園内には防災用井戸が二基あり、災害時には生活用水や公園外からの延焼を防ぐ防火スプリンクラー（放水銃）の水源として利用する。そのため、百 $\times$ 五十 $\times$

の地下貯水槽に常時水を蓄え、災害に備えている。また、平常時はトイレの洗浄水や池の補充水として有効利用を図っている。

非常用トイレ二百十基を設置

非常用トイレは、合計二百十基設置してある。汲み取り式で、個々に独立した便槽を地下に埋設したもの。平常時はベンチとして利用するベンチ型やマンホールの蓋だけが表面に見える独立型、公園トイレに設置してある併設型などがある。災害時には各便



腰掛け部分の上板をはずすと、非常用トイレになるベンチ

いる。また、避難者の誘導・情報手段としての照明設備や放送設備など、災害時の使用を想定した防災施設の整備をした。

公園施設については、既存の自然環境をできるだけ生かし、安全で楽しく利用できる施設整備に努めた。

主な施設としては、スポーツやイベントに利用できる多目的広場、子供たちに喜ばれる遊びの池や大型遊具の設置、鳥類を中心とした小動物園のほか、自然の散策やのんびり休

槽に収納されている布製の囲いを組み立て、その上に覆うとトイレになる。

約二万人の一時避難を想定した避難場所として、国土交通省の避難面積基準（一人当たり二平方 m ）に基づき、多目的広場など約四万平方 m の避難スペースを確保した。

ヘリポートも整備

このほか、ヘリポート（場外離着陸場）の整備や非常用発電機二基の設置と併せ、地下タンクには三千 kg の軽油も備蓄して

憩のできる緑地、芝生の広場など、平常時も子供から大人まで楽しめる公園の整備を行った。開園以来一年が経過しようとしている。この間、おかげさまで市の内外から、多くの皆さんに来園いただいている。

本公園が災害に強いまちづくりの「象徴」として、二十世紀から二十一世紀へ受け継がれるとともに、引き続き親しみ愛される公園となるよう、さらに機能の充実に努めていきたいと考えている。

あなたもいつとき田舎人に 豪雪生かした夏・冬のイベントで



松之山町振興課地域振興係
佐藤 仁

変わった町民意識

松

之山町は新潟県の南西部に位置し、標高約千メートルの関田山脈で長野県と接している。昭和三十年のピーク時には約一万一千人だった人口が、高度経済成長とともに若年層の流出や挙家離村が相次ぎ、現在は三千二百人と激減している。

また、過疎に拍車を掛けた原因の一つに豪雪がある。五十年代前半までは幹線の一部しか除雪され



ず、ひとたび豪雪になると陸の孤島と化していた。平年の積雪が三メートルを超える松之山町でも五十九年の豪雪は異常で、役場前の観測

点で五十六センチにも達した。その後二年続けて四メートルを超える豪雪となり、町民にも雪に対する意識の変化が生まれてきた。

一つは厄介者の雪を資源として利用できないか、もう一つはうまく付き合っていく（克服する）にはどうしたらよいかという問題だった。行政・民間・地域などがそれぞれの立場で考えたが、その中からいまでも続いている二つのイベントが誕生した。

若者主導の冬まつり

六

十二年一月、浦田地区で「越後松之山豪雪塾」が開催され、首都圏を中心に約六十人が参加した。パンフレットには「田舎の小正月を！ 雪とのたわむれを！ 農家に民泊雪国体験を！」と記され、地区の若者たちが行政の手を借りずに企画から運営まで手探り状態で行った。

過疎と豪雪で沈んでいる地区でも、見方を変えればどこにも負けない雪の量があり、雪のない都会の人たちに雪国体験をしてみたらう場所を提供できる。本格的な体験をするなら農家に民泊するほうがよいし、地区民も自分

たちも楽しめるイベントにしないと長続きしないと考え、小正月の伝統行事である「さいの神」、ふるまいに結びつく「重箱パーティー」、冬毛に覆われたうさを捕まえる「野兎狩り」を三本柱とした。

一番苦労したのが人集めで、親類縁者、友人知人などに声を掛けたが、実施ひと月前になっても十五人しか集まらず、どうすれば呼ぶことができるか苦悩した。この状況を心配した地区出身者がツテのある新聞社を紹介してくれ、首都圏版のイベント欄で紹介されると問い合わせが殺到した。静観していた地区の人たちも民泊や体験講師を引き受け、参加者に満足感を与えられるよう努力した。

一回目の決算は十七万円の赤字となり、町から補助金を出すという話もあったが、自分たちで始めたことだから借金をしてでも頑張ろうということになった。このときの踏ん張りがメンバーや地区の団結を強くし、行政に頼らない自分たちのイベントという誇りが生まれた。豪雪塾は一番冬らしい二月の第二土・日曜日に開催され、ここできしか体験でき

ない喜びと、地区の人びととのふれあいを楽しんでいる。

夏は町が主催

浦

田地区の豪雪塾に刺激を受けた町では、雪を夏まで保存しておいて真夏に雪国体験ができないか検討した。幸い大きな断熱シートがあることが分かり、大蔵寺高原で保存状態を確認する実験を開始した。築かれた雪山に重機で二重のシートをかぶせ、時々雪の減り具合を見ていたが、八月になっても予想以上の雪が残ることが確実となった。

夏の目玉イベントがなかった町では、帰省客も参加できるお盆に「真夏の雪まつり」を開催することにし、雪の感触を楽しめるようはだして行う種目を考えた。雪上綱引き、がまん大会、人間挽馬、早飲みリレー、ボブスレーなど、最初は雪の冷たさにワーワーキャーキャー言っている、季節を超えた体験に喜ぶ人がほとんどだった。

五年ほどすると参加者が多くなり、駐車場や電気・トイレなどの問題が発生した。このため、会場を大蔵寺高原の中心部に変更し、併せて開催日も八月第二土曜日とした。イベント終了後は開放され、雪を持ち帰る人、溶けるまで連日遊びに来る人などにぎわっている。

雪を利用した対照的なイベントだが、共通するものは雪を楽しむことであり、少ない経

参加者とのふれあいが強くなる重箱パーティー



費で参加者を喜ばせることである。豪雪塾の運営費は参加者の入塾料がすべてであり、真夏の雪まつりは町負担の八十万円だけである。後発組の大規模な雪まつりと比較するとあまりにも小さなイベントだが、町のイメージアップに果たした役割は大きい。

小さいながらもぬくもりを

豪

雪塾の三本柱を長く続けているが、初めて参加する人にとっては新鮮な体

験であり、何回も参加している人にとっては古里に帰って来たように感じるらしい。失われていく農山村の純朴な人情にふれ、イターンする人や民泊先と親戚づきあいをする人もできた。どのようなイベントでも最後は人と人とのふれあいであり、真似ができそうできないイベント、それが豪雪塾なのかもしれない。どちらも今年で十五周年を迎えたが、特別なことをする予定もないし考えてもいない。

お金をかけて大規模に行えばもっと人が集まるかもしれないが、許容範囲を超えた受け入れは参加者に満足感を与えない。小さいながらもぬくもりが感じられ、マンネリのなかにも活力を引き出す工夫をしながら両イベントとも続けたい。

また、保存する雪の量を増やせばほかにも分けることができ、いまでは東京都文京区の地藏通り商店街や埼玉県加須市にも運んでいる。

豪雪地に暗いイメージしか与えてこなかった雪が、除雪と保存技術の進歩により宝に変わろうとしている。素材を生かすも殺すもアイデアとやる気、そして支えてくれる仲間や地域の協力が本場の宝なのかもしれない。

逆転神の発想でまちおこし

地震を自信に

岐阜県根尾村

学術的に価値の高い地震断層が出現 世界遺産登録の運動展開へ



根尾村教育長
島田数雄



春うらら、天下の名木淡墨桜が満開になって、この桜を見ようと多くの人がとて華やいている山里にも百九十年という時の流れにより風化しようとしている、い



尾張地方が被害の中心であったため、この名称がつけられた。根尾村を震央とした地震はマグニチュード八・〇と推定され、わが国内陸部で起きた地震としては史上最大級だった。犠牲者は七千八百八十五人。

たましい出来事があった。

村は壊滅的な被害に

明

治二十四年十月二十八日早朝、ゴゴゴ

響とともに発生した濃尾地震は、峡谷型にそびえる山々をたちまちに崩し、土煙が竜巻のように舞い上がるなど一時は暗黒となって、この世の終わりのかと思われるほどのすさまじい様子であったと伝えられている。この地震は外国でも有名となり、MINOOWARI地震と呼ばれ、まさに身の終わりを思わせる地震であったといわれる。

この濃尾地震は、岐阜県美濃地方と愛知県

根尾村では、百四十五人が死亡、全家屋千三百十九戸のうち八戸を残してほぼ全壊し、村は一瞬にして壊滅的な被害を受けた。この地震で注目されたのは、八十キロに及ぶ断層のうち水鳥地区における落差六メートル、水平ズレ四メートルの断層崖の出現である。

この断層は世界的に有名となり、昭和二十七年に国の特別天然記念物に指定された。学校の教科書や外国でも紹介され「根尾断層を研究しないと一流の学者になれない」といわれているほど学術的な価値が認められている。根尾村は日本の真ん中に位置し、豪雪多雨

地帯として知られ、厳しい自然環境下に置かれている。標高は中心地で百七十メートル、九六パーセントが山林に囲まれた典型的な山村。村の人口は、二十五年の六千二百二十五人をピークに減少の一途をたどり、平成十二年の国勢調査では、二千八百八十四人にまで減少、少子高齢化の進行も例外ではない。村では観光立村により活性化を図る施策を進め、平成元年には、ふるさと創生資金で温泉掘削に成功したが、人口減少に歯止めをかけることができなかった。

新たな観光資源の模索

昭

和六十三年に濃尾震災から百年の節目を迎えたのを契機として歴史的な遺産である断層を活用した新たな観光資源を模索、

地震専門の学者に保存保護や活用の方を願いし検討を重ねた結果、断層部分を掘り下げて地表を露出させ地層のズレを観察することのできるいわゆる断層トレンチ（大型溝）を整備することになった。

この構想は、学術的にも新たな観光施設としてもほかに例を見ないユニークな事業として、計画の具体化に大きく踏み出した。

しかし、この根尾谷断層は、国指定特別天然記念物のため、事業施行には、当然ながら文化財保護法による文化庁の許可が必要だ。「貴重な文化財の一部を犠牲にしても地震のメカニズムの解明など学術研究に資する成果は余りあるものがある」と地震学会がその重要性を強調したことから、現状変更の許可をいただくと同時に整備計画の策定に着手した。ちょうど時期を同じくして自治省の「地域づくり推進事業」の指定を受けることができた。この根尾谷断層ラウンド整備事業（事業費五億百万円）は、ユニークだとして全国的にも注目された。

地震断層観察館がオープン

この事業は、断層を輪切りにする格好ですり鉢状に二十センチ四方を地下に八メートル深さまで掘削し、ピラミッド型の三角屋根を付け地震資料館も併設。三カ年の継続事業により平成二年十二月に着手し、三年十月、六層にわたって垂直に降起した断層が出現した。カミソリで切ったかのように鮮明なもので予想以上の成果を収め上屋の完成を待って、四年三月、百年の眠りのペールを脱いで地下観察館としてオープンした。断層のズレを直接観察できる施設は、世界でも初めてとあって開館一年間に八万人の入館者を記録した。五年三月にはピラミッド型の地下観察館横に円型ドームが完成した。地震資料館で

ある。これを機に二つの施設を合わせて「地震断層観察館」に改称した。

地震資料館では五十人の収容ホールに二百センチの大型画面のビデオで「根尾谷の自然」と題し、豊かな自然の中で営まれる村民の暮らしや、文化財の紹介、また、震災直後の写真をコンピュータグラフィックスで構成し、断層発生のメカニズムがリアルに再現される。常設展として震災直後の貴重な写真や文献を展示したコーナー、地震の仕組みやメカニズ

地震断層観察館の地下観察館



ムを直径三メートルの地球儀に映像モニター六台を組み込んでおり、子供たちの学習の場としても活用できる。

入館者50万人に

十 年三月には立体映像を見ながら阪神淡路大震災などの地震を疑似体験できる地震体験館も新たに加わり、館内はさらに充実した。入場料金は地震資料館入館料五百円のほか二百円がかかる。開館以来九年で累計五十万人の達成が十三年度中に見込まれることになった。どちらかといえば地味な存在の施設が、一躍脚光を浴びるようになったのは、阪神淡路大震災後の地震災害に対する関心の高まりからで、根強い人気を保持している。

阪神淡路大震災の後に同じ直下型の震源地として、また断層という共通点を持った兵庫県北淡町に、入館料の一部を義援金として持参したのが縁で友好の絆が深まり、地震関連の情報交換などを通じた交流が新たに始まった。この貴重な自然遺産を恒久に保存活用するため、世界遺産登録を視野に入れた運動の展開も考えている。この事業によって村の活性化の起爆剤となったことは間違いない。観光立村「百万人の交流人口」の実現を目標とした手ごたえを感じながらさらなる飛躍への足がかりとして「夢拓く桜源郷NEO」のキヤッチフレーズに向け挑戦を続けていきたいと思う。

88キロ、標高差8000メートルと極限の闘い 町民が一体となりランナーをサポート



村岡町企画振興課主査
吉村 隆雄

感動のゴール

平 成十二年九月二十四日、制限時刻三分前の午後六時五十七分。とつぷりと日の暮れたゴールに十三時間以上走り続けた最後のランナーが、足をひきずりながらも満面の笑顔で入ってきた。テープを切るとスタッフやボランティア、そして既にゴールしたランナー、残念ながら途中で棄権したランナーなどからも歓喜の拍手が沸き上がった。その瞬間「第三回村岡ダブルフル・ウルトラランニング」に出場した四百四十五人のランナーの挑戦が終わった。そして、それを支えてきたすべてのスタッフ・ボランティアにとって最高の瞬間がおとずれた。

としても有名な「但馬牛の原産地」でもある。六年には第四十五回全国植樹祭が開催されるなど、豊かな自然を生かした「森の恵みに生きるまち」としてまちづくりを推進してきたが、依然として若年層を中心とした人口流出に歯止めがかからない状況にあり、少子・高齢化が深刻な問題となっている。

きっかけ

村 岡でマラソンの大会をやるう、平成八年のとある会議後の立ち話。メンバーは、町内でペンションを経営する田丸明人さん、同じく電話工事業を営む久保井洋次さん、そして町の教育委員会に勤務する片山正己さん。

田丸さんは村岡の観光に危機感を持っていた。「村岡の雄大で美しい自然をもっと多くの人に知ってほしい、そのためにはどこに出しても恥ずかしくないイベントがいる」。

久保井さんは国内はもちろん、海外のマラソン大会にも参加する根っからのアスリートである。「マラソンの素晴らしさを村岡の人にも知ってほしい」。

片山さんは教育委員会に二十五年近く勤務する中で、近年の青年活動の衰退を目の当たりにしてきた。「今の若者には小さな集まりだけではなく、もっと幅広いつながりが必要だ」。三人の思いはそれぞれ違っていたが、手段としてのマラソン大会実施は一致するものであった。

その日から、村岡ダブルフル・ウルトラランニング大会に向けての準備が始まった。

翌九年には町内の各団体や有志による実行委員会も立ち上がり、実施に向けての作業がスタートした。実行委員会での話し合いでは「もともと三つの町や村からできたこの村岡で、町全域でのイベントに住民の参加や協力が得られるだろうか」「こんな不便な田舎にランナーが来てくれるだろうか」という声もあった。

しかし、一見するとネガティブなイメージにとらえられがちな「旧村意識」や「交通の不便さ」など山間地特有のマイナスイメージを逆手にとっていくことが実行委員会の基本的なコンセプトとなっていた。ウルトラマラソン

村岡町は兵庫県北部、但馬地域の北西部に位置する人口約六千九百人の過疎の町である。四方を千以上の山々に囲まれ、町の約九割が山林で占められており、例年平地で一メートルを超す積雪をみる豪雪地帯でもある。冬場になると町内にある二つのスキー場は京阪神を中心としたスキーヤー、ボーダーで賑わっている。また、村岡町は松阪牛、神戸牛の肥育素牛

に参加するランナーは便利さなど求めている。とにかく理屈抜きに村岡の厳しい自然の中を走ってもらう。懸命に走るランナーの姿を通して自分たちも忘れかけている地域のつながりや人情も再発見できるのではないか。そのためには受け身でも押し付けでもなくお互いが感動を求めていく。この逆転の発想こそが村岡ダブルフル・ウルトラランニングの原点であり、実行委員会のメンバーにとっても大きな心の支えとなっていた。

そして、十月、ついに実行委員会メンバーの熱い思いが結集したランニングコースが完成した。

都市住民との交流の場にも

実 行委員会によって生み出されたコースは村岡町の雄大な自然や地形をフルに

生かしたものであった。しかしそれは単に町内の美しい景観を楽しむというだけではなく、一番の特色は何といっても過酷なコース設定にある。町内の農林道を活用した総延長八十八キロ、標高差八百メートルというコースを早朝五時半にスタート、十三時間三十分以内に完走というランナーにとってはまさに自己の限界に挑戦するレースである。

また、この大会の大きな特色として、全町民の約一割六百七十人にも及ぶ多くのボランティア協力者によるランナーへのサポートが挙げられる。

コースの大半が山間部ということもあり、ともすれば孤独感に陥りがちなランナーにとって、地元バイク愛好家による先導・救援、消防団員によるコース案内、さらには各集落において子供からお年寄りまでが懸命に小旗を振り声援を送る姿は何よりも心強い。また、各エイドでの「おにぎり」や「そうめん」など趣向を凝らした手づくりのもてなしや、そこでの語らいは、単に休息の場というだけではなく、地元住民にとっても日ごろあまり接することの少ない都市住民との貴重な交流の場にもなっている。

80%超える完走率

こ のように地域住民が一体となりランナーをサポートしていくこ

とで、日本屈指の過酷な山岳ウルトラマラソンにもかかわらず、第一回から完走率は八〇%を超えている。マラソン専門誌における「99年全国ランニング百選」では大会二回目にして第七十八位に選定された。これは、過酷さだけを売り物にするだけではなく、その過酷さを常に住民が温かく支えており、そのことをランナーに感じ取ってもらえたからだと信じている。

この村岡町の「自然の厳しさ」とそこに暮らす住民の「やさしさ」とのギャップが「村岡ダブルフル・ウルトラランニング」の一番の魅力であり、ランナーに「また来年も走り

たい」という気持ちにさせる源となっている。これは第三回大会の参加ランナーのうちリーダーが五割近くを占めるという、うれしい結果としても表れている。

これからの抱負について大会実行委員長である田丸さんに聞いてみた。「今後はランナーと地域住民とのふれあいをもっとできやすい仕組みをつくり、大会に参加したランナーや



その家族がまた村岡町に来てもらえるよう、村岡ファンを一人でも多くつくりたい。ランナーにとっても楽しい大会であると同時に、自分たちも大いに楽しめる大会にしたい」と力強く語ってくれた。

ランナーだけでなく、ランナーをサポートする住民一人ひとりが主役である。それが村岡ダブルフル・ウルトラランニングである。

逆転神

の発想でまちおこし

過疎を逆手にとる会

広島県総領町

こだわった「東京にできない」もの 過疎を楽しむ情報交流の場に

自前のまちづくりへ

総 領町は中国山地の南側、広島県の北東部に位置し、総面積約七十平方キロのほとんどが山林で、谷あい集落が点在する小さな町である。昭和三十年、二村が合併して

総領町になった当時の人口は約五千人。現在では、二千人を割り、高齢者人口も四〇%を超える典型的な過疎の町だ。

町の人口が半減した五十三年、企業誘致特命職員を配置し、「私の町の救世主になってください」という悲痛と思われるようなキャッチフレーズで企業誘致に取り組むことになった。町民の大多数が企業誘致を歓迎したものの、当時はオイルショックの直後でもあり、進出企業はごく限られたが、なんとかプラスチックの工場を一社誘致することができた。しかし、町民の思っていた企業イメージと現実とは大きな開きがあり、二十人の募集に対して応募はゼロ。就労者の確保に行政が奔走しなければならなかった。

この経験を通して、新たなまちづくりの方向を模索せざるを得なくなった。つまり、企

業誘致にしても施設整備にしても、都市を後追いすることになり、二番せんじ三番せんじのミニ都市化を追求することになり、この方向では、都市の魅力に惹かれる若者の定住は有り得ない。

バブル経済に向けて転がり始めた都市は輝きを増すばかり。小さな町まで東京を目指し



総領町長
杉谷 三郎

て限りなき発展（真似事を）を続けようとして、陳情というおねだりを繰り広げていては、こんな小さな町が生き残る道はないと思えなくなった。

都市の後追いをやめようと考えたときに、初めて気が付いたのが、都市にできないことをすること。東京（都市）にはまねのできない、魅力あるまちづくりこそが、定住を促進できるのではないか。企業誘致などの「他力本願のまちづくり」から地域の魅力を掘り起こす「自前のまちづくり」への転換こそが過疎地域に残された道ではないか。

廃校利用のふるさとセンター

ま ず取りかかったのが、徹底した町のポテンシャルの調査。しかし、産業につながったり、観光資源になるようなものはない。結局見つけたのはありふれた自然と廃屋や廃校。

それなら、あるものを活用して「ないものは作るしかない」の決意で、たどり着いたのが、五十六年にオープンした廃校を改造しての宿泊研修施設「ふるさとセンター総領」で



ある。

いざ運営となると、試行錯誤が続き、さまざまな工夫を凝らすうちに、研修に来る人たちへ自分の特技や持ち味を提供するリーダーバンクの設立、利用率を上げるために、徹夜の自作のフォークソングのコンテスト「ふるさとコンサート」など、「東京にできない」にこだわった、自前のまちづくりが、施設にかかわった人の手で次第に広がり始めた。

ふるさとセンターを語るうえで最大の出来事が、作家の永六輔さんとの出会い。永さんが過疎地域でまちづくりの応援をしていることを知り、講演をお願いした。話が面白く、おまけに、永さんの残してくださった資金を元手に考えたのが神社やお寺の寄付方式を取り入れ、会に寄付した人の名前を書くという「落書きだらけのピアノ購入運動」。

永さんの紹介で始めた東京からゲストを招いての「本物を聞く会」も今では町にはなくてはならない行事で、昨年から町民ホール建設を棚上げする代わりに隣のホールの借りて開催する「やどかり文化活動」に発展している。

全国組織としてスタート

自 前のまちづくりを展開する中で過疎を嘆いていても何も生み出すことはできない。それならいっそ逆発想で、過疎を楽しむことはできないかと思い、まちづくりの情

報交流の場として、過疎を逆手にとる会の発想が生まれた。

中国山地の周辺市町村の交流の場というつもりだったものが、ネーミングの勝利というのか、マスコミの報道により過疎問題に悩む全国からの参加があり、いきなり全国組織としてスタートした。翌年からは、行政の手から離れて自立し、会員の増加が続き、現在でも五百人を超える会員を抱えている。

主な活動は毎年開催する過疎問題シンポジウム「逆手塾」と会員のまちづくりを紹介する機関紙の発行で、そのほかには、会員の町に出かけて聞く「カソサカin○○」や講師陣を出張させる「まちおこしキャラバン隊」などさまざまな活動が続け、全国のまちづくりに大きな影響を与え続けている。

会を解散するのが夢

設 立当初の担当者で、現在もこの会のシンクタンク的な役割を果たす和田芳治・総領町教育長は設立直後にこんなことを言っている。「二十年后に、過疎を逆手にとることがいらいなくなりましたといって会を解散するのが夢です」と。

その二十年が間もなく来ようとしている。アンチ東京(都市)、田舎の良さを育てるオンリーワンのまちづくりを哲学に頑張ってきたが、バブル崩壊以後の都市にはなんだか元気がみられない。むしろ田舎暮らしのほうが妙

に輝いて見える、そんな時代になってしまった。

過疎を逆手にとる会も解散を真剣に論議している。そろそろ胸を張った田舎暮らしをアピールする「過疎自慢」への変身をする時期かもしれない。

過疎を逆手にとる会は対外的なアピール度が強く、強烈な印象で小さな町の営みとして

過疎を逆手にとる法

1. 「過疎」は「魅力ある可能性」と信じること。
2. 「ない」ということは「なんでもやれる」という可能性があること。
3. 目標は「東京ではできないこと」をやること。
4. 武器は「アイディア」と「実践」
5. キーワードは「過密」とのジョイント。
6. 壁へのチャレンジは「実績」の積みかさね。
7. 逆手にとるのは「過疎のマイナスイメージ」 廃校、廃屋、多い高齢者、失いかけた活力 etc.
8. ほしい「つれ」は「厳しい古里だからあえて古里に生きる」という人たち。
9. とにかく、他人はどうであれ、己は過疎を相手に楽しく生きること。
10. 「群れ」はそんな「楽しい生き方」を「みせびらかして」つくること。

は大成功といえるだろう。

今また、市町村合併を目前に控え、多くの過疎地域はその地域の存亡をかけた知恵比べに挑もうとしている。窮地に追い込まれたときこそ逆発想はその真価を発揮する。過疎を逆手にとる会の英知がまた輝きを放つ時が訪れ、決意を新たにしている。



昨年初めて自前のきもをつくった。きっかけは、桐生市で行われるきものパーティーに出席するためである。

桐生では毎年十一月三日を「きもの日」として、きものを着る機会を増やす努力をしている。このパーティーは参加者がきものを着て集まり、ワインを飲みながらジャズを聴こうというしゃれた趣向である。

今の職に就いた三年前から案内をいただいているが、欠席の届けを出し続けていた。理由は簡単で、きもの着用が必須であったからである。そこで今回思い切って一式揃えることにしたというわけだ。もちろん妻には、「そのうちお前の分もつくるから」という履行期限の定まっていないう手形を出して事前に了解をとったのは言うまでもない。

パーティーに出席しようと思ったのは、四

百人を超える参加者のうち女性が八割を占めるということも理由にないわけではないが、群馬県の地場産業である繊維産業を応援したかったからである。出荷額の面では機械金属の製造業にかなうべくもないが、長い歴史を有する地場産業は地域のアイデンティティの面でも極めて大切だ。事実、本県の繊維産業の歴史は遠く奈良時代にまでさかのぼり、今でも養蚕や絹織物は重要な地位を占めている。本県の小寺弘之知事も毎年一月四日の仕事始めにはきものを着ることとしている。

さて、いざつくるということになるが柄や色を選ぶわけだが、これがなかなか楽しいものだった。羽織の裏や長じゅばんは大胆な動物柄にし、色の組み合わせを行う。日本人の色彩感覚の豊かさに驚くとともに、全く見えない所やちらりとしか見えない所に気を配る奥ゆかしさに気付く。若いころのアメリカ留学で日本もまだまだ外国から学ぶことも多いと感じたが、一方で、きものはことさらに美せつけたり、言い立てたりしない日本人の美

意識を教えてくれる。

着てみると思ったより暖かい。同時に、作りのぬくもりが伝わってくる気がし、感謝の念がわく。

きものは親からもらったものやそれを仕立て直して着ることも多い。使い捨てでなく、いいものを長く繰り返し使うというのは日本人に昔から備わった知恵ではないか。

そのことはわれわれの社会そのものを次の世代に引き継いでいくことにもつながる。われわれは今さえよければ、自分さえよければ、であってはならない。一人ひとりが駅伝のランナーであり、タスキをつないでいく責任がある。

確かにきものは現代の生活様式に合っているとは言いがたいが、節目節目にもっと着る機会があつてよいと思うし、そのためには着付けを教えることも大事ではないだろうか。

似合う似合うと言われて喜んでいたら、「きものは太っているほうが似合うのよね」と妻から言われた。

後藤新 群馬県商工労働部長

きものをつくって考えたこと



チューリップの花絵プロジェクト=新潟市

新潟県でも盛んなチューリップ栽培。球根育成のため捨てられる美しい花を使って壁画を制作する。

高さ3メートル、幅10メートルの花絵を新潟駅の通路など市内10カ所に飾った。

使った花は15万本。行政の支援を受けない市民ボランティアによるイベント。





地 吹雪体験ツアー＝青森県金木町

白一色の津軽平野をモンペに角巻姿とカンジキで歩き、津軽特有の地面から吹き上げる「地吹雪」と馬ソリを体験。思っきり津軽の冬を味わった後は、鱈を使った郷土料理「じゃっば汁」で体を温める。

体験後は、津軽三味線発祥の地金木町に平成12年にオープンした「津軽三味線会館」で生演奏を堪能してはいかが。

豪 雪を逆手に＝石川県白峰村

全国屈指の豪雪地帯で、雪を「厄介なもの」と考えずに「資源」に利用できないかという発想の

転換をきっかけに「雪だるまウィーク」を設けた。

村民1人ひとりが1個以上のだるまをつくる

親雪型のイベントを実施。



ホ タテ貝殻のリサイクル＝北海道網走市

畑の中に埋めてある排水管は、土がつまらぬよう砂利を被覆材として使用している。

しかし、農機具を傷めるとの指摘があった。

漁業関係者には、厄介ものだったホタテの貝殻を

使ったところその心配もなく、排水効果が大幅に改善された。





一村一品発祥の地＝大分県大山町

大山町は米・麦増産では金にならないとして40年前から「梅栗運動」に代表されるまちづくり運動を展開。加工技術の向上を目指して「全国梅干しコンクール」を開催し、都市との交流施設「おおやま生活領事館」を開設するなど、農村ならではの発想で独自のまちづくりを進めている。



▼ろりが体験できる大平宿＝長野県飯田市

大平宿は200年以上も続いた宿場町。過疎のため昭和45年に集団移住をして集落は消滅した。残った古民家を使用しながら保存していくという理念のもと、いろいろや道具類も当時のままの状態で宿場時代そのまゝの生活を体験したいという観光客に利用されている。



ミカン畑を無料開放＝広島県瀬戸田町

本四連絡橋・尾道～今治ルート開通後、柑橘類の産地瀬戸田町では相次いでレモンがもぎとられた。「タダで採れる場所をつくれれば被害がなくなるのでは」と町、農協は被害を逆に無料ミカン園を一昨年オープン。今年も実施の方で検討中、借り上げた畑は13アール。



非効率のすすめ＝京都府美山町

かやぶき屋根の古い民家が約250棟残っており、日本一の「かやぶき民家」の町として知られる。手を加えず、今はやりの効率性よりも非効率性を尊ぶ。北集落は、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。現在では年間45万人もの人がやすらぎを求めて、美山町を訪れる。





フォーラムよこはま館長
有馬真喜子

このところ各地で男女共同参画社会づくりのための条例制定が活発になっていく。都道府県では東京都、埼玉県、山梨県、三重県、富山県など、市町村では出雲市、塩尻市、都留市などから、続々条例制定の報が届いている。この二、三月の道府県議会、市町村議会を経て、さらに多くの県や市や町や村で条例がつくられることだろう。私が仕事をしている横浜市でも、現在市議会で審議が行われている最中である。

男女共同参画社会づくりが各地でこのように活気づいている背景としては、大きくいつて二つの要因が考えられる。一つは、いうまでもなく、一九九九年六月、男女共同参画社会基本法が制定されたことである。今年一月の省庁再編では内閣府に男女共同参画局が設置され、総理大臣のもとに男女共同参画会議も設けられて、執行体制も整った。男女共同参画は二十一世紀のキーワードであり、最重要課題に位置づけられることが確認された。各地方公共団体でも同様の認識が高まって、条例制定の運びとなったと解される。

もう一つは地方分権意識の高まりである。地方分権の流れを受けて、各公共団体はそれ

ぞれの地域にふさわしい自治体のありかたを主体的に選ぼうとしている。独自の環境保護政策の策定や児童保護政策の策定、新たな発想での税制制定の動き、情報公開のありかたなどの意欲的な試みが次々に伝えられている。地方公共団体の動きは明らかに活発化している。男女共同参画社会づくりのための条例制定もその一つだろう。

したがって、各地の条例は、基本理念は国の男女共同参画基本法にのっとりながら、そ

活発な 男女共同参画 条例づくり

れぞれの地域の実情を反映し、地域での必要性を意識したものとなっている。たとえば共働き率の高い地域では、仕事と家事・育児・高齢者介護などの両立を支援する施策に重点を置き、企業活動の活発な地域では企業に男女共同参画を強く訴え、女性の起業マインドの高い地域では起業支援施策を打ち出し、女性に対する暴力への取り組みが早い地域では民間のそうした活動への支援を掲げ、といった具合である。基本法を制定した総理府（当

時）も、上積み横出しは歓迎、といった。

男女共同参画が、このように時代のキーワードになってきたのは、時代が変化のただなかにあるからである。一九九六年七月、国の男女共同参画審議会が二十一世紀の初頭までを視野に入れてのビジョンを発表したが、そのとき強く意識されたのは、この「変化する時代」ということだった。同審議会では、私もメンバーだったが、男女共同参画を必要とする時代の変化を次の五点に集約した。すなわち、少子高齢化の進展、国内経済活動の成熟化と国際化、情報通信の高度化、家族形態の多様化、地域社会の変化である。

一つひとつに触れる紙数はないが、少子高齢化の進展はいうまでもなく、たとえば経済構造の変化一つをとっても、新しい産業や起業への期待は大きく、その際、期待は男女共に及ぶはずである。新しい社会づくりには、従来のアクターに加えて新しいアクターが必要とされるわけで、男女共同参画はまことに時宜を得た提案なのである。

男女共同参画社会づくりのための条例が効果を発揮するまでにはなおしばらくの時間が必要だろう。条例がいきいきと動き出したとき、どのような活力ある自治体が出現するかが楽しみである。

生徒会役員が保護者にパソコン伝授 先生役は大変、でもやって良かった



高知市立城北中学校教頭
近藤亮樹

開かれた学校づくりの役割

高 知市立城北中学校（久保田晋校長・生徒数七百十四人）は、高知市の北部に位置し、高知県で第二の大規模校である。本校校区は、高知市の代表的な商業地域や新興住宅地、農業地域で構成されており、また、官公庁の官舎があるため県内外の転出入も多く、保護者の教育に対する期待は大変大きい。PTA活動に対しても積極的な参加が得られており、学校運営に大きなかわりを持っている。

学校は地域とともに存在し、地域の力なしでは、学校の活性化には限界があるのではないだろうか。地域の持つ教育力と学校の持つ教育力とを合わせ、プラス方向にその力を生かしながら、最大限に発揮することが開かれた学校づくりの最も大きな役割ではないだろうか。私たちはそのような考えのもとに取り組みを進めてきた。

閉鎖的な印象を持つ学校現場の様子を少しでも地域に発信することによって、生徒たちが学校でどのような学習をしているのだろうか。また、どんな活動をしているのだろうか。

といった声に少しでも応えることができればと考えている。

城北中学校夏期講座の開設



本 校では、「開かれた学校づくり推進委員会」が正式に発足して三年目に入る。

推進委員は、生徒会役員、先生方をはじめ地域住民、PTAの代表者計四十人で構成されている。地域の代表者には、各地区の青少年育成協議会会長を中心として児童委員にお願いしている。

過去、学校のオープン化を目指してさまざまな取り組みを試みてきたが、平成十二年度は、学校という場所を地域の生涯学習の場として活用できないものだろうか、またそのこ

とをきっかけに地域の方々に学校の様子や、学習内容を知っていただけるチャンスになるのではないかと、さらには、地域の活性化に貢献できないものだろうかと考え、今回「城北中学校夏期講座」と銘打って、生徒会役員が保護者や地域の方々を対象にコンピューターを使った授業を行うことを計画した。つまり、生徒が、大人に教えるのである。従来の考え方からすると逆の発想ではあるが、かなり興味深く、IT（情報技術）時代にふさわしいものになると確信した。保護者や地域の方々の積極的な参加がそれを裏付けているように思える。

七月七日に一回目の開かれた学校づくり推進委員会が持たれて以来、生徒会中心に当日の授業案づくりに放課後遅くまで時間を費やした。実際のところ夏期休暇に入ってから、具体的な話し合いが持たれたが、一向に進まない日々が続いた。

授業はどんなふうにする？ 生徒たちの真剣な叫びが生徒会室に響いた。
生徒たちにとって、とにかく初めての経

整理整頓

本日の流れ

1. パソコンの電源を入れる
2. 授業の準備
3. 授業の開始



生徒会長のキーボードの説明から授業がスタート

当日、コンピューター室に緊張した生徒会役員の表情があつた。続々と参加してくる方々に挨拶をしながらも、緊張は増すばかり。参加申し込みは四十人近くあつたが、当日所用で来られなくなった人がおり、実際のところ三十五人の参加であつた。年齢層もかなり差があり、生徒たちの予想は的中した。いよいよ初めての試みコンピューターを使

好評だった暑中見舞いはがきづくり

験であるため、どのように授業を進めていったらよいのか、終始疑問を持ちながらの授業づくりは当然のことである。最終的には初めてコンピューターに触れる人もいることを想定して、コンピューター用語の説明、とくにマウス・Enter Keyなどの説明を行いながら授業を行っていくことを決定した。

つての暑中見舞いはがきの作成に入った。一時間三十分を予定していたが、実際は二時間あまりの長い授業となった。印刷段階に入つて、出来上がったはがきを見て、「ワーすごい!」「やつとできた!」など参加者から歓喜の声が上がつた。

参加した保護者の方々からは、①コンピューターは苦手意識があつたけど、今日の講座を受けて少し身近になつた②全く初心者で参加した。生徒のみなさんにとっても親切にしていただきすぎてきなはがきができた。またやつてくださーいなどたくさん温かい言葉をいただいた。

授業を行った生徒会役員は、①先生役は大変だった。準備したり、抜けているところがないか気になり緊張したけど、多くの人がパ

授業には家族、親子での参加も



ソコンを使えるようになって喜んでくれたのでうれしい②いつもは教えてもらって側だけど、教える側になつてその苦労が分かつた③やつて良かった。また、来年もこの企画に挑戦してみたいーなど前向きで意欲的な言葉が返ってきた。

各校それぞれの特色ある取り組みがなされているであろう。本校は、前記の目標を柱に、これからも生徒会活動の活性化、PTA活動の活性化、さらにこれからの学校の在り方について模索しながら取り組みを進めていきたい。地域は学校のパートナーであるべきであるし、学校は良きパートナーのもとと教育効果を高める役割を責務としていると痛感する。

学校の持つ教育力と地域の持つ教育力、両面からの働き掛けが一つになったとき、そこにはきっと学校の真の姿が見えてくるであろうし、保護者や地域の方々温かいまなざしや、また生徒たちの生き生きとした表情に出会えるものと信じている。

今年度においては、一つの手だてとして、初めて生徒たちが授業を行う取り組みを行ってきたが、生徒たちの感想からは、授業の準備や工夫など本当に大変だったけど、終わった今、すごく充実した満足感を味わったと感想を述べてくれた。この言葉をしっかりと受け止め、さらに教職員一丸となって取り組みを続けていきたい。

全国トップクラスのドライバーが参加 全日本戦「ひえつきラリー」選手権

都会の人を魅了する四季

九州中央山地の険しい山あい、宮崎県の

北西部に人口三千八百人の椎葉村はある。総面積五三六・二平方キロの九六％が山林という典型的な山村集落である。また、少子高齢化、過疎化という深刻な課題を抱える村の一つでもある。こんな村だからこそ、行政、

農林業、商店街、全村民がそれぞれの役割を再認識した地域おこしが必要とされている。中でも、「自然」と「歴史」と「民俗芸能」を用いた地域おこしは、特有の産物であり、それが売りである。春の新緑、夏の川遊び、秋には民謡「ひえつき節」の日本一大会、そして大自然がつくりだす紅葉パノラマ。これをバックに平家の落人伝説がよみがえる「平家まつり」、冬には国指定「椎葉神楽」が、二十六地区で奉納される。四季折々のすべてが都会の人を魅了する。

こんな自然豊かで静かな村で開催されているイベントがある。毎年五月下旬にオフロードテクニクを競う「全日本ラリー選手権」(四輪駆動部門)だ。

ギャラリーは県外からも

全

国からトップクラスのドライバー・役員を含め、約四百人が集まる。このラリー選手権は、全国各地で第一戦から五戦を行うが、その中の一戦を当地で開催している。これまで十五回行われた。全国レベルの選手権とあってギャラリーは県外からも多数当地を訪れる。このときばかりは静かな緑深まるこの村がカラフルな衣装をまとったラリー車の爆音でにぎわう。

今年で十六回を数えるこのイベントは、今では村に根付いた三大イベントの一つに数えられている。始まりは、昭和六十年。地元県内の主催者である日本自動車連盟(JAF)加盟クラブの「ルート・10・延岡」からの申し入れだった。このクラブは、五十一年から活動を開始し、九州ジュニアチャンピオン戦(初級者クラス)、九州チャンピオン戦中・上級者クラス)を開催してきた。徐々に主催者としての実績をつくりながら、国内ラリー界では最高峰と言われる「全日本戦」開催へとこぎ着け

たのである。

「全日本戦」ともなると、選手やエンジニア、その他関係者への対応が必要となる。開催地の条件として、まとまった宿泊施設を有していること、オフロードコース延長が長く多彩なコースレイアウトに適していることが挙げられる。

この条件を満足する候補地として主催者が目に留めたのがわが村である。村の中心部に民宿・旅館が十七軒建ち並び、管理する林道の総延長は二百六十九キロと全国第三位で未舗装部分も長い。この立地条件は、県内のどこを探してもない。ぬかるみだったり、でこぼこ道のこの悪路が逆にラリー選手権には最適であった。

無事故が成果

六十年に主催者である「ルート・10・延岡」より正式に開催の申し入れがあった。

開催地に決定されると、選手・関係者が、四日間当地に滞在することになり、村にとってはメリットになる。宿泊先の民宿や旅館をはじめ商店街が潤い、村の知名度もアップす



椎葉村企画開発課商工観光係長
尾前広史



る。このように、村は経済的な効果を考慮しても活性化につながるものと確信し、開催地としてこの全日本ラリー選手権を受け入れることとなった。「平家伝説とひえつき節」の里のキャッチフレーズにちなんで「ひえつきラリー」と称してスタートした。

当ラリー選手権は、主催者側と開催地が整っていれば実施できるというものではない。開催できるまでには、クリアしておかなければならない問題が二つあった。コースである林道に入るには、国・県道を経由することと

なる。移動に公道を使用するため所轄警察署と道路管理者との協議、許可が必要になる。数回の現地調査において指導を受けながら最善の策を講じてきた。そして、何よりも重要視しなければならないのは選手への安全対策である。毎回、危険が予想される箇所については、路肩の補強、コースサイドの盛土、ガードレールの設置などの道路整備を行ってきた。各コーナーにはその旨を知らせる看板の設置、コース各ポイントに医者と搬送車両の配置、競技車両の通過確認に至るまで万全を期している。ここにかんがりの競技役員を要するが、「これだけは節約できません」と主催者は言う。本ラリー選手権は、無事故で終了したときに初めて成果が問われものだと感じる。

選手に愛されるイベントに

一 つ目は、地域住民の理解である。本選手権一週間前には、放送通信施設「オフトック」の利用や主催者が直接一軒一軒を回り、コース沿線のすべての住民に対し林道の封鎖時間、競技車両の通過時間、通行方向などの説明を念入りに行い理解と協力を得ている。開催当時は賛否両論あったが、今では村全体で旗を振り大会の成功を願っている。こうした村が一つとなった後押しがあつてか昨年の第五戦「ひえつき・2000」も大成功を収めた。「雄大な景色、豪快なコース、地元への歓迎ぶり、これほど素晴らしいラリー会場はちょっとないですね」と選手からの声も届いた。そして、全国各地の全日本戦の中であらゆる面で最高のラリーであつたとの評価を得ることができた。

今後は、主催者と開催地の歯車をしっかりと噛み合わせ、参加する選手や関係者の方々に愛されるイベントとしてゴールを目指したい。もちろん、地域住民からそがれる潤滑油も忘れてはならない。

今年も春にはラリー車の爆音が、ふところ深い山里にこだまする。



デジタル・ミュージアム構想の推進について

1 はじめに

「デジタル・ミュージアム構想」については、この稿でたびたび紹介している（平成十一年八月号、十二年四月号）。前回は、デジタル・ミュージアム構想の基本的な考え方および十二年度における取り組みの方向性

について紹介したが、その後ほぼ一年を経過し、本構想の実現に向けた成果および課題も明らかになりつつある。ここでは、十二年度を通じた取り組みの経過および十三年度以降における取り組みの方向性について、具体的課題などを踏まえながら紹介したい。

2 デジタル・ミュージアム構想と平成十二年度の取り組み

(1) デジタル・ミュージアム構想

デジタル・ミュージアム構想については、十二年四月号において紹介しているが、詳細については省略するが、概略について整理すると、近年のデジタル・ネットワーク時代において注目されている、文化財などを電子的に保存する「デジタル・アーカイブ」の一環として、地域の美術館や博物館などの文化施設を地域文化の情報蓄積・発信拠点と位置付け、「ためる」「つなぐ」「いかす」

のキーワードで、地域が主体となる情報資産を高度に活用することにより地域の活性化に資するための環境整備を行うというものである。

(2) 十二年度における取り組みの方向性

本構想については、ハイビジョン・ミュージアム構想の見直しが提言された九年度以降、その方向性について検討されてきたが、十二年四月二十八日に自治大臣官房総務審議官名で「デジタル・ミュージアム構想の推進について」（以下「総務審議官通

知」という）が各都道府県知事および政令指定都市市長あて通知された。

すなわち、九年度の「地域デジタル・アーカイビング等に関する調査研究」において、新構想の基本的方向性を「地域文化の情報発信」とすべきとの提言を受けたことを踏まえ、近年の生活様式および価値観の変化、過疎化や高齢化の進展などから、その継承が困難となりつつある広義の地域文化（伝説、神話、祭り、伝統芸能、習俗などの広い意味での歴史的遺産、伝統文化など）を保存する手段の一つとして、デジタル・アーカイブの概念を採り入れ、失われつつある地域文化を電子的に保存・継承するとともに、旧構想で蓄積したデジタル画像データを含めて「情報資産」という形で今日のデジタル・ネットワーク技術を活用することを通じて地域の活性化に資するための環境を整備することを念頭に以下の取り組みを行うこととした。

μの普及

標記システムの整備（ハード事業）について、「地域活力創出プラン」の一事業である地域情報通信基盤整備事業の対象とし、地域総合整備事業債による財政措置を講じる。

② デジタルコンテンツの制作支援

地域の博物館や美術館などの文化施設に保存されている有形の文化財や、地域の祭礼などの無形の文化財などをデジタル・データ化する経費について地方交付税措置を講じる。

③ 地域文化デジタル化事業

本構想の一環として、②により制作されたデジタルコンテンツを素材として、地方公共団体における地域文化のデジタル化を促進する「地域文化デジタル化事業」を推進する。

(3) 取り組み経過

総務審議官通知を踏まえ、本構想の方向性に基づいた施策を実施・検討してきたが、ここでは、前の取り組み状況について課題などを織り交

地域情報通信基盤整備事業によるデジタル・ミュージアム・システムの整備

平成12年度より新たに、デジタル・ミュージアム・システム(コンテンツは含まず)の整備に対して、地域情報通信基盤整備事業により財政支援措置を講じる。

(H11年度)

施設と一体で整備した場合のみ
財政支援の対象になる

(H12年度～)

デジタル・ミュージアム・システム単体の
整備でも財政支援の対象になる

(デジタル・ミュージアム・システムの財政措置スキーム)

地域総合整備事業債特別分	75%	一般財源	25%
元利償還分	30～55%	事業費補正	最大15%
地方交付税措置			

施設(箱モノ)と一体で整備する場合、ケーブル敷設部分については、地方交付税の事業費補正(最大15%)の適用あり

ハイビジョン・ミュージアム・システムは、これまでと同等の措置が講じられる(施設と一体整備のみ)

デジタル・コンテンツの制作に対する地方交付税措置(平成12年度)

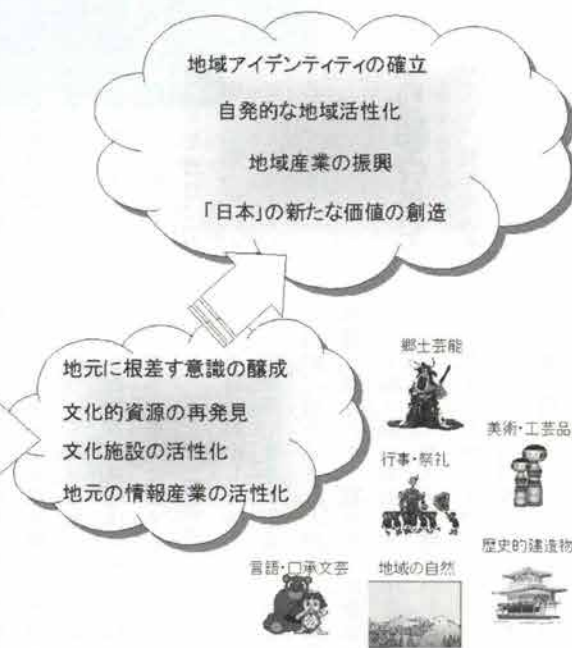
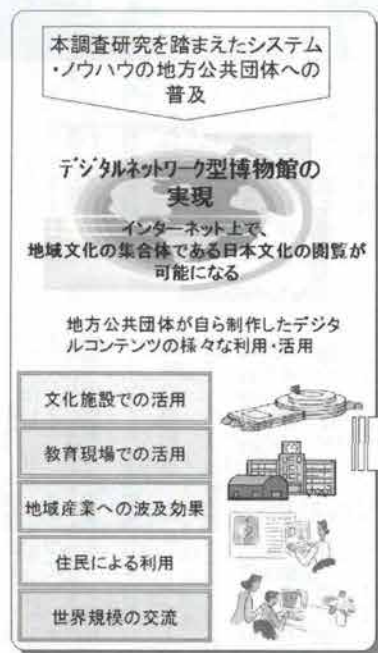
都道府県

- 普通交付税(単位費用)による措置 総額25億円
標準団体(人口:1,700,000人)当たり36,054千円

市町村

- 特別交付税による措置 総額5億円
- 対象経費:撮影許可料、企画づくり、撮影料、デジタル化経費、
書誌データ作成費、インターネット変換経費、その他
- 平成12年度:9月4日付けで照会、10月26日まで報告 ⇨ 3月分で交付
- 平成12年度実績:45市町村においてデジタル・コンテンツを制作

デジタル・ミュージアム構想の将来イメージ



ぜながら報告したい。
①デジタル・ミュージアム・システムの普及について

デジタル・ミュージアム・システムについては、前述のとおり、十二年度から財政支援の対象にした。本システムは、十年度に実施した「次世代ハイビジョン・ミュージアム・システム」の開発に関する調査研究において策定した「統一的仕様書」

に基づいたシステムを地域情報通信基盤整備事業における地方財政措置の対象とした。本事業は、主たる事業メニューが情報拠点施設の整備や光ファイバーの敷設などなので、地方公共団体の関心もそちらに向いている傾向が見受けられるが、本システムを活用すると見込まれる教育委員会や公立文化施設に知っていたいただきたい事業である。従来は、いわゆる

「箱モノ」との一体整備において対象となっていたが、本事業では、システム単体の整備であっても対象としているので、機器更新を行う場

合や既存施設にシステムを設置する場合において活用していただきたい。
②デジタルコンテンツの制作支援について

地方公共団体におけるデジタルコンテンツの制作に対する財政支援については、ソフトに対する支援という意味で画期的な措置であり、十二年度は、都道府県分を普通交付税の単位費用（総額二十五億円）で、市町村分を特別交付税（総額五億円）で措置した。都道府県の制作状況については、今後調査を行う予定だが、市町村分については、特別交付税の算定過程において制作状況を把握している。概要について紹介したい。

十二年度は、四十五市町村においてデジタル・コンテンツの制作が行われ、所要の経費について特別交付税措置を行った。制作コンテンツの内容を検証してみると、美術館や博物館における所蔵品、遺跡・歴史的資料、祭礼・伝統芸能、地域紹介などのデジタル化と多岐にわたっており、ユニークな取り組みとして、方言による民話の収録や地域に伝わる薬草、産業技術史のデジタル化などがみられる。

③地域文化デジタル化事業の検討について

地域文化デジタル化事業については、総務審議官通知において方向性を打ち出して以来、そのあり方について検討を行っている。地域創造

デジタル・ミュージアム・システムによる手づくり番組制作の研修



に「地域文化デジタル化事業」の推進に関する構想委員会（委員長…三隅治雄（財団法人民族芸能国際交流協会理事長））を設置し、本事業のコンセプトおよびフレームワークなどについて検討を行っている。

④①③の取り組みにおける課題

十二年度における①③の取り組みを通じ、いくつかの課題も明らかになっているが、最大の課題は、本

思いを強くした。

3 今後の取り組みについて

十三年度においても、前年度の取り組みを継続して推進していくこととなる。とくに、デジタルコンテンツの制作に対する支援については、市町村に対する支援を増額（五億円→十億円）して措置することになっているので、積極的に活用していただ

取り組みについて、実際に事業を行うと思われる担当部署（教育委員会、文化施設など）にいかにかつていただくかということ。で今年度における市町村の取り組み（今年度の取り組みの大半は、業者などを通じ間接的に事業を知ったというケースであった）や各種講習会などを通じ、「現場」に知っていたかどうかという工夫が必要であるという

きたい。また、本事業によって制作したデジタルコンテンツについては、本構想の推進母体であるデジタル・ミュージアム推進協議会（会長…梶原拓岐（岐阜県知事）のホームページ（<http://www.digital-museum.gr.jp/>）への登録の依頼を検討している。で、その際はご協力をお願いしたい（登録方法などについては、検討中）。

なお本構想については、IT（情報通信技術）の進展下において地方公共団体が早急に取り組むべき事項などについて提示した「IT革命に対応した地方公共団体における情報化施策等の推進に関する指針」（十二年八月二十八日情報通信技術（IT）革命に対応した地方公共団体における情報化推進本部決定）および、本指針に盛り込まれた内容の計画的推進を図るため、自治省（総務省）として取り組む事項などを年度ごとに提示した「地域IT推進のための自治省アクション・プラン」（十二年十二月二十五日同本部決定）においても重要施策の一つとして位置付けられており、各地方公共団体における地域IT施策を総合的に推進される際にも、明確な位置付けをもつて取り組んでいただきたい。

艦船に間違えられ「軍艦島」に



松尾和敏

長崎県高島町建設産業課長

高島町は、長崎市の南西海上約一四・五[＊]（定期船で三十五分）にある日本で一番面積（一・二七平方[＊]）が小さく、人口（九百八十六人）も日本一少ない町である。それからさらに、船で約十分の海上に浮かぶ無人島。それが端島、通称「軍艦島」である。

島の歴史は、文化七年、石炭が見され、明治三年から石炭を採掘。二十三年から三菱グループによる本格的な経営が行われ、昭和十六年には、年間出炭量四十一万^トを記録。それ以降四十九年に閉山するまで日本経済の発展に貢献してきた。

最盛期の人口密度は世界一

島之最盛期の人口は、四十一年に五千二百六十七人。当時の人口密度は東京都の九倍強で世界一であった。端島炭鉱が閉山したのは、四十九年一月十五日。当時の人口は、四十六人。その年の四月二十日には、すべての住民が島から退去し、無人島となり、現在に至っている。

らつけられている。

また、島には樹木や花などの緑が少ないため「緑なき島」とも呼ばれている。

軍艦島の所有者は、三菱マテリア（株）だが、島には、高層アパートの老朽化に伴うコンクリート落下による事故防止や船を接岸する桟橋などの施設がないなどの理由により、所有者の許可なく上陸することは禁止されている。

しかし、マスメディアの報道やN

HKがロケで昨年春上陸したことで、県内外からの問い合わせが役場に月二十件以上もある。

また、高島などから船をチャーターして軍艦島を周回できるため、最近とくに注目を浴びるようになった。当時の軍艦島は①幼稚園は、九階建ての高層アパートの屋上に増設されていた②学校のグラウンドが狭い



ので、野球やソフトボールはホームラン性の打球でも海にボールが落ちるとアウトかチェンジ

③緑が少ないので、高層アパートの屋上に土を運んで畑をつくり、花や野菜を栽培④パチンコ店や床屋、飲食店などの一部は、アパートの地下で営業とユニークなものだった。

島中みんなが家族みたいに連帯感が強く、大人から子供まで、「ひとつの家族」として生活していた。

今後、町の重要な遺跡ともいえる

軍艦島をどのように活用していくのか大きなテーマである。

石炭を魚にかえて島おこし

最後に、高島炭鉱も六十一年に閉山し、最盛期一万余人、閉山当時五千四百九十一人いた町の人口が九百八十六人まで激減し、過疎化が進んだ。平成三年に水産庁から「マリノベーション拠点交流促進総合事業地区」として認定を受け、「石炭を魚にかえて島おこし」をテーマに、釣れる魚種が豊富な「飛島磯釣り公園」「コバルトブルーの海がきれいな「人工海水浴場」の整備を行い、今では、毎年多くの観光客が訪れている。十三年度から海水温浴施設（タラソテラピー）、多目的運動公園、風力発電機の設置などの整備事業に着手する予定である。

今後とも、人と人とのふれあいを大切にし、「人情のある和のまちづくり」をモットーに、観光のまちづくりを町民一丸となって推進する。

高島町は、日本一元気な町である。



TOPICS 身近な地域から「福祉文化」の創造を

14年度までに29地区で拠点整備



有賀 正 長野県松本市長

文化薫る アルプスの城下町

松本市は平成七年から市独自の「福祉ひろば」事業に着手し、身近な地域から「福祉文化」を創造することを目的として、一定の成果を挙げつつある。長野県のほぼ真ん中に位置し、北アルプスの玄関口と四百年余りの歴史を持つ国宝松本城を擁する観光都市として全国に知られている。かつて筑摩県庁が置かれ、古くから県中南部の経済、産業の中心地であり、交通の要衝地でもある。

人口は約二十万九千人で、昨年十一月一日に国から第一次特例市の指定を受けた。

高齢化率一八・五％、ひとり暮らし高齢者率は八・二％、要支援・要介護率は一〇・八％。

市のキャッチフレーズは「文化薫るアルプスの城下まち」。また、山岳の岳都、才能教育やサイトウキネンフェスティバルなど音楽の楽都、旧制松本高校で現信州大学を擁する学園の学都の三ガク都を標ぼうしている。

もともと進取の気風に富み、住民自治や教育熱心な風土がはぐくまれ、地域でのコミュニティ活動が盛んで、地域での福祉づくりへの素地があったといえる。

平成四年三月の市長選初当選の際、「29地区福祉拠点の整備」を公約として掲げた。当時は前例がなかったことから、「健康なお年寄りの遊び場はいらない」「税金の無駄遣い」などと批判にさらされた。そこで助役と庁内公募による職員で研究会を設置し、五カ月にわたる議論を経て政策原案をまとめた。その内容は①高齢者の立場に立つ②公助・共助・自助の役割と連携③地域主義での解決④先進的福祉事業に学ぶ⑤生涯学習との連携⑥職員の仕事見直し―の六点である。

これに基づき、七年二月に「松本市地区福祉ひろば条例」の制定と各地区ごとの推進協議会の組織化を行い、八年十月には「福祉ビジョン懇話会」を設置した。

福祉ビジョン懇話会での三部会に分かれた議論の中で、福祉を特別な

ものと考えず、受け手の発想から問い直し、生活や地域という要素を大切にすると問題提起を行った。

福祉ひろばは 小さな拠点施設に

七年から開設した福祉ひろばは、身近な日常生活圏の市内二十九地区に一カ所ずつ配置するという計画で現在二十五カ所で整備済み。十四年度までに全地区整備を目指す。未整備地区は他の公共施設を代替している。建物は平屋建て百五十五平方メートル程度、百平方メートルの教養娯楽室が一つあり、床はタイルカーペット張りで床暖房が基本。世代間交流の拠点施設の機能を求めて、公民館など公共施設と併設スタイルにしている。発想を転換し、生活圏から遠く離れた大きな福祉センターではなく、身近で小さな拠点施設を整備することにした。

機能面では①住民のふれあいの場の②相談の窓口③地域の健康づくり④地域の福祉づくり⑤ボランティア支援⑥福祉の担い手づくりなどが挙げられる。

推進体制は、自主運営に基づき、町内会長、民生委員、保健指導員、ボランティアを加えた「地区福祉ひろば事業推進協議会」を各地区に組織し、市は専任コーディネーターの配置と五十万円前後の事業費や維持管理費の実費を負担し、運営は協議会に委ねている。

事業は①健康増進と介護予防②交流と生きがい事業③身近な相談と安心ネットワーク④地域福祉のまちづくりとボランティア・NPOへの支援⑤情報の提供と地域課題の学習―の五項目に分類できる。

柱となる ふれあい健康教室

最も柱となる事業は「ふれあい健康教室」。保健婦と専門員で一チームを組み、健康相談や健康体操、レクリエーションなどを行い、閉じこもり防止に大いに効果を上げている。「地域の福祉を語る集い」や、週二回の昼食配達によって見守り安心型ネットワークの一端を担う「ボランティア参加型訪問給食サービス」もあ

る。「地区介護者の集い」ではまず話を聞くことを第一に心掛け、介護者が本音で語れる雰囲気をつくる。

基本理念としては、参加数の多少を評価するのではなく、イベントの乱発を避け、日常的で地道な活動に光を当て、地域づくりとしての資質を高めることに重点を置いてきた。

福祉ひろば利用者のアンケート結果からは、楽しみが増えた、人との会話が增えた、友達ができたという効果を挙げる人が七〇%にも上った。

「福祉文化」とは、福祉を中心とした地域活動によって実現される社会的価値観のことで、①住民が自らの問題として参加学習し、地域の課題



今井の保育園児との交流

を解決②福祉を中心として、人にやさしく、人が尊重される地域づくり③物や金、競争、科学技術に偏らない持続可能な人間社会、循環型社会に向けた価値観の共有④住民が主体となった健康づくりを重視する健康文化の実現―で、言いかえれば、だれもが安心して心豊かに暮らせる社会の実現といえる。

課題と 将来展望

今後、介護予防や要介護状態の改善にどう取り組むかが注目される。寝たきりとならずにいきいきと健康で暮らすためには、生活習慣や運動習慣の改善が必要だ。生涯を通じた



和田のふれあい健康教室

健康づくりへの取り組みには、保健医療との連携強化、教育委員会との連携による「熟年体育大学」の活用や、各地区での気軽に相談できる場づくりが必要となる。

生活に合理性だけを求めると、近隣地域での煩わしい人間関係を避け、お金で解決を図り、弁当配達や見守り電話は民間サービスを利用すればよいという考えが生まれることも事実である。しかし、これでは地域の機能は弱体化していく。新しい時代に適合した町内会の在り方は、福祉のキーワードを用いた自発的な活動の中に答えが見つかるのではないだろうか。

今後とも、行政の自己満足ではなく、「地域の福祉の力」を育て、福祉ひろばの実践と学習を繰り返しながら「学習参加型の地域づくり」をさらに一歩ずつ着実に進めていきたい。

本市では昭和四十九年に心身障害者福祉都市を宣言し、福祉先進都市の実現と、「健康福祉日本一」のまちづくりという大きな目標を掲げてきた。だれもが安心して心豊かに暮らせるように、「市民本位」の「市民のために開かれた」市政により、「住みよい街、住んでよかった街」の実現を目指して、松本市独自の福祉文化を全国に発信していきたい。



笹賀のふれあい健康教室



新村のニギニギ体操

元氣者に圧倒された

高知の

「タノシムチカラ」

全国各地で地域づくりに取り組む八百数十人が一堂に会し、「第十四回地域づくり団体全国研修交流会 高知大会」が、一月二十六、二十七日の両日、高知市で開催された。

主催は、地域づくり団体全国協議会、第十四回地域づくり団体全国研修交流会高知大会実行委員会、高知県地域づくり連絡会議、こうち元氣者交流会、高知県、高知市。

また、室戸市、馬路村、夜須町、香北町、赤岡町、南国市、本山町、中土佐町、大正町、十和村、西土佐村の高知県内十一市町村の共催である。

今大会のテーマは「タノシムチカラ」。「地域づくり」とは何なのか、その答えの一つとして「地域をタノシムチカラ」を提唱しているのであるが、県外からの参加者約五百五十人は、まさに高知の元氣者たちの「タノシムチカラ」に圧倒されながら、二日間の日程を通じて、それぞれの答えを探していった。

橋本知事、井天小僧演じる

大会は、高知市内の隣接した二つの会場で開催されたが、その運営を

りて紫の衣装を着込み歌舞伎のいでたちをした「白浪五人男」。地元赤岡町の「土佐絵金歌舞伎伝承会」の協力による演出で、伊藤善市・地域づ

くり団体全国協議会会長、橋本大二郎・高知県知事、松尾徹人・高知市長、新原芳明・総務大臣官房審議官、吉田弘正・勤地域活性化センター理
開会式での「白浪五人男」あいさつ



事長の五人が扮したものである。歌舞伎の「稲勢川勢ぞろいの場」の設定でのあいさつとなったが、とくに井天小僧菊之助に扮した橋本知事の「成人しきれぬ若者に活を入れるも二度三度」のくだりは会場の大きな歓声と笑いを誘っていた。

味わえた「参加」の実感

続いてそのまま全体会パート1へと移行。旗揚げアンケート方式により、会場全体で地域づくりにについて考えるという趣向で開催された。ボランティアで手伝っていたいたいたN H K高知放送局の山田康弘アナウンサーと畠中実行委員長の進行で、「高知へは何時間かけて来ましたか?」「この大会では何を心得て帰りたい?」などの六つの質問に、参加者たちはあらかじめ資料と一緒に配られていた五色の色紙を使って答え、ひとたび自分にマイクが向けられると、少しでも多くのことを語ろうとする姿が見られた。中には富山県から三十時間以上かかって駆けつけたという女性も。また、「何を想い地域づくりにかわっていますか?」との質問には、参加者の九割近くが「かわることが自分を高めることになる」を選択していた。会場全体で「参

全国に広げたネットワーク

参加者は会場を移動して十三の分科会に分かれ、地域づくりのための知識を吸収し、考えを深めていった。受け入れ団体の事例発表と参加者からの提言や意見交換、受け入れ団体と参加者四、五人で車座をつくっての語り合い、参加者によるグループワーク、「よさこい踊り」の体験など、その内容や運営方法は多彩だった。複数の分科会では、後半はオー

ブン形式として出入り自由とするなど、参加者の好奇心に少しでも応えるための工夫もなされており、いずれの分科会も高知の元気者たちにつられて「タノシムチカラ」を発揮し、地域づくりを語る人びとの熱気にあふれていた。



交流会での「よさこい踊り」の様子

研修会に続く交流会。各受け入れ団体の協力による、かつおのタタキやくえ鍋、シシ鍋、嶺北ビーフなどの海の幸と山の幸、地酒や地ビールさらには「ごつくん馬路村」など、まさに高知県中の「おいしいとこどり」のごちそうを前に、研修会での余勢も手伝って、乾杯の音頭のときには既に並べられていた料理のほとんどがなくなってしまうというハブニングも発生した。参加者たちは、開会式に引き続き今度は坂本竜馬の仮装で登場した松尾市長とも交流を繰り広げるなどして、熱い想いを語り合いながら、ネットワークを全国へと広げていった。

そして、平成十二年のよさこい全国大会で最優秀賞を受賞した「ほにや踊り子隊」による踊りの披露や、会場からも参加しての踊りで交流会の盛り上がりは最高潮に達し、終了後の夜なべ談義も夜遅くまで終わることはなかった。

地域づくりの答えは?

大会二日目は、「あなたにとつての地域づくりは見つかりましたか」をテーマに全体会パート2。まずは、

各分科会における成果を参加者全員で共有するため、

受け入れ団体からの発表に続き、会場の参加者からも感想や意見が活発に発表され、「他の分科会にも参加したかった!」というつぶやきも多く聞かれた。そして

再び旗揚げアンケート。前日の結果とも対比しつつ、参加者たちが大会で何を学んだのかを探っていた。そして最後の質問は「あなたにとつての地域づくりの答えは見つかりましたか?」。

会場では、「見つかった!」が約二割、約七割の人が「答えを再確認、再認識した」に旗を掲げる結果となり、「やっぱり人なんだな」ということを再認識した「この大会にはなかったが、高知でもらったエネルギーをもとに自分で見つけていく」などの意見が出された。

そして最後に畠中委員長から、その

ほとんどを手づくりで一年半かけて準備をしてきた実行委員たちが紹介され、大会は盛会のうちに幕を閉じた。大会開催中はずっと雨が降っていたが、閉会後会場を出たころには、



第11分科会

参加者たちの気持ちを象徴するかのよう、冬の高知の素晴らしい青空が広がっていた。

（副）地域活性化センター研修交流課
副参事 嘉村隆治

地域づくり団体探訪 津山・城西まるごと博物館フェア実行委員会

岡山県津山市

歴史的町並みを生かした 博物館構想

大正ロマンの薫りを目指して

手仕事をテーマにした 地域づくり

津山市は、人口約九万人の岡山県北の中心都市。江戸時代、森氏・松平氏と引き継がれた藩政が安定するにつれ、街道沿いに多くの商人や職人が住み城下町が形成された。現在に至るまで歴史的町並みが保存され、旧出雲街道沿いに昔ながらのはたごのたたずまいが残っている。歴史的文脈が息づき、手仕事や年中行事が地域コミュニティにマッチした形態で発展している。

市内の城西地区では大正ロマンに



鐘楼がついた仁王門を持つ愛染寺

しかし昭和三十年ころから、この地区でも中心市街地の空洞化問題が深刻になってきた。鉄道駅の施設により町の動線が変わった。中心部の多くの地区で高齢化率が三〇%を超えるといたった現実が事態に拍車を掛けている。大正期のハ

満ちあふれた作州民芸館を中心に、ハイカラな木造建築の中島医院、城下町の出入り口として大番所が置かれていた翁橋などの建造物が建ち並ぶ。一方には鐘楼がついた仁王門が、珍しい愛染寺、森家の菩提寺法源寺、城下の総鎮守で秋祭りには三百貫の大みこしが登場する徳守神社など十

五カ所に及ぶ寺社が鎮座する。そして町には提灯屋、竹ざお屋、のこぎりの目たて屋といった民芸の技が光る職人芸が今もまちのそこここに点在している。

都市型エコミュージアム を目指して

イカラな町並みと社寺、武家屋敷跡といった城下町の名残が併存するこの地区で、手仕事をテーマとしたイベントを開催し地域づくりをしていこうという試みが始まった。

平成三年にまちの活性化を期して「津山まちづくり市民会議」が結成され、城西地区の活性化についても調査研究が進められた。町並み景観、通行量、通りの由来などを調査したうえで全国のまちづくりの成功事例をヒアリングし、さまざまな活性化のアイデアが提案された。市民会議の一人の発案から地域アイデンティティであるこの歴史的な町並みを生かし、地域全体を一つの博物館ととらえる「津山・城西まるごと博物館構想」がまとめられた。

農村環境をテーマとした取り組みがなされていますが、津山市でも旧城下町の歴史的景観、文化を紹介し、地区の活性化を図る手法としてエコミュージアムを参考としています」と市民会議メンバーの皆木憲吾さん。この構想を実現させようと「津山・城西まるごと博物館フェア実行委員会」は八年六月、行政と民間が協働して設立された。同年九月第一回のフェアが開催された。現在、「津山・城西まるごと博物館フェア



実行委員会」は城西地区十六町内会の代表と約三十人程度の企画スタッフで構成されている。

毎年九月の下旬、全国から集まったクラフトマンによる展示・販売を中心に、お寺めぐりスタンプラリー、民芸館で開かれるミルクホールなど「大正ロマンの薫る町城西」をテーマに同フェアは開催される。

手仕事に着目したイベントが珍しかったことから、儲け度外視で全国のクラフトマンが集まってきてくれた。出店者の世話、宿の提供などについても町を挙げてもてなしたことも奏功し、初回の参加店舗が二十軒であったものが現在では五十軒以上とにぎわう。約二万五千人の観光客が訪れる一大イベントに成長し、近県からのリピーターも多い。

「このフェアも昨年で五回を数えた。城西地域が津山の銀座と呼ばれ、最もにぎわった大正時代のような活気を取り戻すきっかけになるようこれからも盛り上げていきたい」と委員会の井上隆士さんは語る。

さらに、同委員会は年一回のフェアの開催にとどまらず、まち全体を

都市型エコミュージアムとするまちづくりの実現に向けて、日ごろから町並みや地区の手仕事を紹介するマップづくりや調査活動にも積極的に取り組んでいる。九年にはインターネット上にホームページを開設し、バーチャルミュージアムとして情報発信を行っているという。

城西の顔・作州民芸館

城西の町並みにひととき異彩を放つ旧土居銀行の建物は、津山市の大正期の貴重な遺構である。作州民芸館は平成五年にこの跡を利用して開設。「津山・城西まるごと博物館」の中核を占め、城西地区の顔となっている。その運営が町内会に委託されているところが特筆される。

内部に津山市を中心に作州一円で今も作られている手織作州紬、津山



作州民芸館(裏側)

箔合紙、和ろうそく、手吹きガラス、作州和紙といった職人芸を一堂に集めており、こうした民芸品、郷土玩具などを常設展示することを通じて、手仕事の産業に対する認識を深めるとともに、こうした民芸品を生み出した内陸の風土や工人たちの真しな精神を感じ取ることができるところである。

「今後は、地域の伝統的産業の振興や後継者の育成を図り、市民生活のゆとりと潤いや伝統を生かした美しい生活環境の整備を追求し、城西地区を活性化していきたい」と井上さんは語った。

地域住民の連携に期待

同フェアを一過性のイベントに終わらせないよう、今後どのように活動を進めていくかが課題だ。現在、季節ごとにイベントを織り交ぜて、地域住民の連携を深め、地域を活性化させる構想もあるそうだ。これからどのように城西まちが変わっていくか楽しみだ。

中心市街地でも新しい取り組みが始まっていた。アーケード街で二百

年以上昔の古民家を再利用した雑貨店をはじめ、商店街の活性化を試みている水野明浩さんは「津山市はまだまだ知られていない魅力にあふれ、懐が深い。例えば、津山科学教育博物館はもともと個人のコレクションで約十一万六千点の標本とパノラマ



フェアでの大道芸

が展示されています」と語る。

今年も、九月の下旬に同フェスティバルが開催される予定である。大正時代のロマンと文化の薫りを求めて津山を訪れてはいかがだろうか。

(助)地域活性化センター研修交流課
副参事 木村隆広

津山・城西まるごと博物館
フェア実行委員会
プロファイル

●設立年 平成八年六月
●代表者 倉見蔵
●構成 約三十人
●事務局 津山市山北五二〇
津山市都市計画課内

できる人ができるときに

海藻おしぼを地場産品に

やることが大切

扉を開けると、いきなり「マイ・

ネーム・イズ」。ナイス・トゥ・ミート・ユー」という声が飛んできた。

一瞬沈黙のあと、一気に笑いが起きた。ゆげ女性塾は、いつもこの「笑い」に満ちている。

ゆげ女性塾のある弓削町は、瀬戸内しまなみ海道のほぼ中間に位置し、今治市から高速船で約一時間の距離にある四つの島からなる町である。ノリ養殖業が盛んに行われており、また、山の斜面を利用したハッサク栽培も盛んである。古くは造船・海運業に従事する島民も多かったが、不況の影響を受け人口の流出が進み、過疎化とともに少子・高齢化が進行している。

そのような中であって、ゆげ女性塾の活動は活気にあふれ、多くの町民を巻き込んで、無意識のうちに弓

削町の「再生」が図られている。

好奇心旺盛なメンバー

ゆげ女性塾の活動は、平成五年六月に始まる。当時、愛媛県は「生活文化県政」を推進するため、人材育成の観点から県内市町村に一つずつ「生活文化女性塾」をつくる施策を実施していた。弓削町においても各地区から一人ずつ、職業が偏らないよう三十代から四十代の中堅女性が集められ、地域リーダー育成のため始められたのがきっかけである。この施策は一年間の限定であり、その間、さまざまな勉強会が行われた。集まったメンバーの関心がとくに「環境問題」だったため、「ゴミ問題」などを中心に町の行政や歴史などについて毎月一回開催された。そして、施策終了後も幅を広げ現在ま

で続いている。

メンバーは、十八人。月一回の定例会に加え、それ以外に月二、三回集まり、ほかしや廃油せっけん作り、講演会の主催や清掃活動、廃品アートに地域イベント協力、果ては「弓削の歌」の制作など、さまざまな活動を行っている。現在は、「海藻おしぼ」の作製が中心に行われており、これは、いわゆる「海藻」の「押し花」で地域資源の掘り起こしということで始められた。海に囲まれた弓削町にはさまざまな海藻があり、それを「海藻おしぼ」に加工して、しおりや壁飾りを作製し、一部を地場産品として販売している。現在では、町の小中学生、高校生に作り方を教えるまでになっている。「メンバー全員が好奇心旺盛。だれかが口火を切れば何でもやる。最近

では人に頼まれてやることも多い」と事務局の村上律子さんは言う。

伝統文化活動に力注ぐ

そのような中で最近最も力を入れているのが「伝統文化」に関する活動である。まず、平成八年から二年間かけて「弓削民俗誌」を作製している。これは、メンバーが地域のお年寄り約三百人に聞き取り調査を行い、地域の歴史、伝統、文化、習慣などをまとめたものである。この活動は、地域のお年寄りとの交流を活発にするとともに、お年寄りを元気にし、コミュニティ活動の幅を大きく広げた。何よりも、二年間かけて



ゆげ女性塾のメンバー
左から2人目が村上さん

やり遂げたという自信とお互いを信頼する団結力をメンバーに抱かせたことが、大きな収穫となった。
この「民俗誌」作製が発端となつて、ゆげ女性塾による伝統文化活動



「衛門」の顕彰と伝承活動のため、途絶えていた「庄衛門踊り」を復活させ、同時に特産品として「庄衛門だんご」をつくり、イベントなどで販売している。それら以外にも、古い地名を入れた「小字地図」を作製したり、しめ縄作りや味噌作りなど、お年寄りが持つ「技術」の継承者となるよう教えを受けている。

お互いを褒め合う

このようにバイタリティあふれる活動を行っているが、ここに至るまでにはさまざまな障害があった。活動を始めた当初は、他の女性団体からのやつかみもあった。女性が外に出るといふことで家庭の理解がなかなか得られず、家族にもいやがられた。離婚の危機を迎えた人もいた。しかし、団体としての活動が広く認められ始めると、家庭でも徐々にその活動を認めざるを得なくなつていった。とくに、民俗誌を作ったことが家族の理解を増すのにひと役買った。「うちのお母さんが、こんなにすばらしいものを作れるんだ」「妻がここまでやるとは……」など

家族の理解が進んだ。

ここまで来れば後は順調になるかと思われるが、最近では、メンバーが集まらないことが悩みの種となつていく。これは、子供の教育費がかかり始めているために、パートに出るメンバーが多くなつてきているためである。しかし、「できる人ができるときにやろう」「お互いを褒め合いながらや

塾がとり組んだ作品



ろう」をモットーに活動している中で、それぞれがお互いに補完し合いながら活動が続いている。メンバーがそれぞれの立場を理解し、それぞれの活動を認めている。活動開始以来、メンバーがほとんど変わらずに続いている。「メンバーが集まって活動を行うと必ず何か得るものがある。会う度に必ず一つはある。現在は、

そのようにお互いを向上させることができるようになった」メンバーの心の中にはこのような思いがある。

他の団体との連携深まる

昨年、地域づくり団体全国協議会発行の「わいわいわいど」への寄稿がもとで、兵庫県との交流が始まった。民俗誌を作製したときの縁で金田一春彦氏と交流しており、同氏が文化功労賞を受けたときも同氏の祝賀会に招待された。今まであまり連携が図られていなかった町内にある女性団体とも、町が設けた「弓削町女性会議」を通じて連携を深めることができるようになった。

村上さんは言う。「私たちの活動は趣味と実益を兼ねている。すべてが思いつきである。思いつきであるが、足跡をたどるときつちりと一本の線ができていく。いろいろな人がいろいろなことに取り組み、次々と広がりが出ていく。『人は財産』とはよく言ったものである。いろいろな知恵を授けてくれる」と。

今まで蓄積してきた活動が、今、外に向かって広がろうとしている。次は何をするのか楽しみである。

（財）地域活性化センター情報サービス課 副参事 花輪幾夫



第12期生、30人巣立つ

国も期待する 修了生の活躍

全国地域リーダー養成塾の第十二期修了式が二月九日(金)、東京都中央区銀座ラフィナート「月光の間」で盛大に行われた。

今期の塾生は総勢三十人。北は北海道から南は鹿児島県まで市町村、地域づくり団体、商工会など派遣元は多種多様だった。

修了式では、まず助地域活性化センターの吉田弘正理事長が「地方分権一括法が施行され、自己決定、自己責任による地域の主体性を確立することが重要である。この塾で得た知識、ノウハウ、あるいは人脈を地元を持ち帰り、リーダーとして活躍してほしい。今後、困難に直面しても、寝食を共にした仲間、お世話になった講師の力を借りてそれぞれの道にまい進していただきたい」とあいさつした。

次いで森巖夫塾長が「修了レポー

ト発表会では、その内容が実に理論的で、発表態度が堂々としており、皆さんの成長ぶりが感じられた。この塾での皆さんの成果が問われるのはこれからである。自信を持って地域づくりに励んでいただきたい」と訓辞した。

塾生一人ひとりに塾長から修了証が手渡された後、来賓を代表して、総務省大臣官房総括審議官の林省吾氏が「地域づくりの先進事例の中には、必ず特筆すべきリーダーが存在し、行政、住民が手を携え、まちづくりを行っている。このようなリーダーとなつてほしい。国としても、修了生の活躍に大きな期待をしている」と祝辞を述べ、修了生たちを激励した。

地域リーダー育成目指す 養成塾

塾生派遣元の自治体などを代表して、岡山県落合町の辻麒一郎町長があいさつ。塾生を代表して福井県大

野市の横井一博さんが、「塾で学んだ知識や貴重な体験をもとに、広い視野と深い識見、卓越した想像力と豊かな人間性を備え、常に問題意識と確固たる使命感を持ち、積極的・主体的な行動のできる地域リーダーを目指して、住民が生き生きと誇りを持てる地域づくりを実践していきたい」と謝辞を述べた。

リーダー塾は、地域づくりの担い手となるリーダー、とりわけ独創的な発想と実行力のある地域リーダーを育成しようと、平成元年度から旧自治省(現総務省)および関係団体の協力で開催している。

なお、塾長の森巖夫氏(明海大学教授)を始めとする、四人の主任講師は十二年度をもって退任され、十三年度からは、塾長に大森彌氏(千葉大学教授、東京大学名誉教授)、主任講師に卯月

盛夫氏(早稲田大学教授)、北沢猛氏(東京大学大学院助教授)、小田切徳美氏(東京大学大学院助教授)、辻琢也氏(政策研究大学院大学助教授)

を迎え、新たな体制の下、まちづくりの中核となる地域リーダーの育成を目指す。

十二期生の修了で、第一期から計



三百五十五人の地域リーダーが全国に誕生したことになる。

助地域活性化センター研修交流課
副参事 曾田智生

地域だより

ふるさと銀河線にSL登場
沿線PR目指し26年ぶり

北海道北見市と十勝管内の一市六町を結ぶ第三セクター鉄道「ふるさと銀河線」に蒸気機関車を走らせようと、沿線自治体と同線を運営する北海道ほく高原鉄道（本社・北見市）は実行委員会を設け具体策を協議している。

構想では、蒸気機関車はJR北海道から借りて運行する。期間は夏休みで観光客の入り込みの多い七月二十九日から八月四日までの一週間。運行本数は未定だが、二両編成案が有力。この分は臨時ダイヤ扱いとなる。

銀河鉄道の営業区間は百四十キロ。実行委員会では蒸気機関車、PR費に千四百万円程度かかるとみて、道やその外

郭団体さらに沿線自治体から財政規模などを勘案しながら拠出金を求める。

北見市では「銀河線をもっと知ってもらい、合わせて観光のPRも」と将来への効果を期待している。実現すれば旧国鉄池北線時代の昭和五十年以来二十六年ぶりとなる。

また、発着の北見、池田両駅には機関車の回転台がないため方向転換ができず、帰りは機関車が後ろ向きで運行という珍しい光景が見られる。

なお、銀河線は沿線人口の減少による乗客減で毎年五億円近い赤字を出している。

青森ねぶた、年末から
大英博物館で展示

東北三大夏祭りの一つとして全国的に有名な青森ねぶたがイギリス・ロンドンの大英博物館に展示されることになった。

青森ねぶたは平成三年、ロンドンで開催された「ジャパン・フェスティバル91」で運行後、大英博物館に寄贈されたが、老朽化し、処分された。同博物館から①ねぶた祭り

は長い歴史と伝統のある民俗行事で、人びとの生活に生きている②ねぶた師（制作者）に非常に関心がある一として再度、展示の要請があった。イギリスでは五月から一年間、全土で交流を通じて日本を紹介するための参加型・滞在型のイベントの開催が予定され



ており、ねぶた展示はその一環。

ねぶた師は北村隆さんで、題材は源義経渡海。大きさは大型ねぶた（幅九メートル、奥行き七メートル、高さ五メートル）と同程度。制作期間は十一月十四日から十二月十七日までで、十二月十八日には完成を記念してオープンニング・イベントを予定している。展示は来年三月上旬まで。

なお期間中、滋賀県八日市の大風も同時展示される。

町職員、役場への文書取り次ぎサービスー長野県高森町

高森町は職員の自宅玄関に「高森町役場行き 文書取次所」と書かれた札を張り、役場あての書類を近所の住民から頼まれたら、本人に代わって出勤のついでに届けるサービスを行っている。

対象書類は、公民館活動の報告書、農業委員会への要望などの簡易文書。個人の秘密に関するものや金銭にからんだり、委任状が必要なものは引き受けない。

取次札は三役を除く六十人

の職員宅に張っている。大きさは縦三十八センチ、横十三センチ。

公共施設に電力供給で水力
発電所建設ー広島県芸北町

広島県芸北町は、第三セクターで運営する温泉・宿泊施設「オークガーデン」など町の公的施設に安い電気を供給しようと水力発電所の建設に乗り出した。

同町の年間平均降水量は二千四百〜二千五百ミリと全国的にも雨が多い地域。計画によると、町内を流れる滝山川に取水せきを設け発電所を建設するもので、総事業費は約十五億円。

一月十六日に着工し、十五年三月に稼働の予定。年間発電量は三百八十四万キロワットで、一般家庭約千戸が一年間に消費する電力に匹敵する。

同町ではオークガーデンに現在の半額程度の料金で電力を供給するほか、運動公園、体育館での照明、暖房もまかなう予定。また観光農園、電気を使う温室にも提供し、余剰があれば中国電力にも売電したいとしている。

センター 通信

◆平成十三年度地域づくり誌 コンテスト入賞作決まる

地域づくり団体全国協議会
は、昨年度に引き続き、地域
づくり団体などの発行する

「地域づくり誌」コ
ンテストを実施、こ
のほどその審査会を
行った。

このコンテストは、
各地域づくりの現場
で情報発信の中心
な役割を果たしてい
る「地域づくり誌」
の質の向上を支援す
るもので、同協議会
が主催し、同地域活
性化センターと、同日本
宝くじ協会が後援し
ている。

コンテストは「地
域づくり団体の部」



と「都道府県協議会の部」の
二部門で行われた。二十三道
県から総数三十八点（地域づ
くり部門二十九点、都道府県
協議会部門九点）の応募があ
り、その中から次の七点が受
賞した。

●地域づくり団体の部

〈優秀賞〉

新潟の水辺を考える会（新潟県）

「新潟の水辺だより」

財えひめ地域政策研究センタ
ー（愛媛県）

「もったい通信」

「舞たうん」
もったいない総研フォーラム
（福岡県）

「もったいない通信」

●都道府県協議会の部

〈優秀賞〉

鳥取県シゲおこし団体連絡協議会

「因伯人」

地域づくり団体広島県協議会

「夢ごよみ」

地域づくり団体沖縄県協議会

「わんからや」

〈奨励賞〉

地域づくりネットワーク埼玉
県協議会

「ネットワーク彩フロント」

表彰式は三月二日（金）、東京
都内で行われ、地域づくり団
体全国協議会の伊藤善市会長
から表彰された。

詳しい内容は、今年七月発
行の「わいわいわいど十六
号」で紹介される。

◆竹下景子さん
吉田理事長らと歓談

テレビ番組「笑顔がいちば
ん！」でおなじみの女優竹下
景子さんが二月二十三日、財
地域活性化センターを訪れ、
吉田弘正理事長らと歓談した。

吉田弘正理事長らと歓談した。



竹下さんは平成十三年度も、
同番組のナレーションを務め
ることになっている。

◆「地域活性化ビデオ」 第24巻が完成

財地域活性化センターでは、
毎年地域活性化施策の参考と
なる「地域活性化ビデオ」シ
リーズを制作しており、三月
末に第24巻「動き始めた新し
いまちづくり循環型社会の
実現に向かって」が完成し
た。

会員には、すでに
一本ずつ配布したが、
ご希望の方にはビデ
オの貸し出しを無料
で行っているの
で、ご利用ください。

●問い合わせ先 業務第一課
電話 〇三（五二〇二）六一三六



笑顔がいちばん／放送予定

●4月1日

愛知県足助町、犬山市
はなやか おひな街道
伝説の大山祭り

●4月8日

マスターズゴルフ特別番組のため
「笑顔がいちばん！」は休み

●4月15日

福井県小浜市、今立町
若狭おばま
地域ふれあいサロン 福祉の地
域づくり

●4月22日

愛媛県伊予市、朝倉村
五色浜復活祭
ふるさとの観光拠点

●4月29日

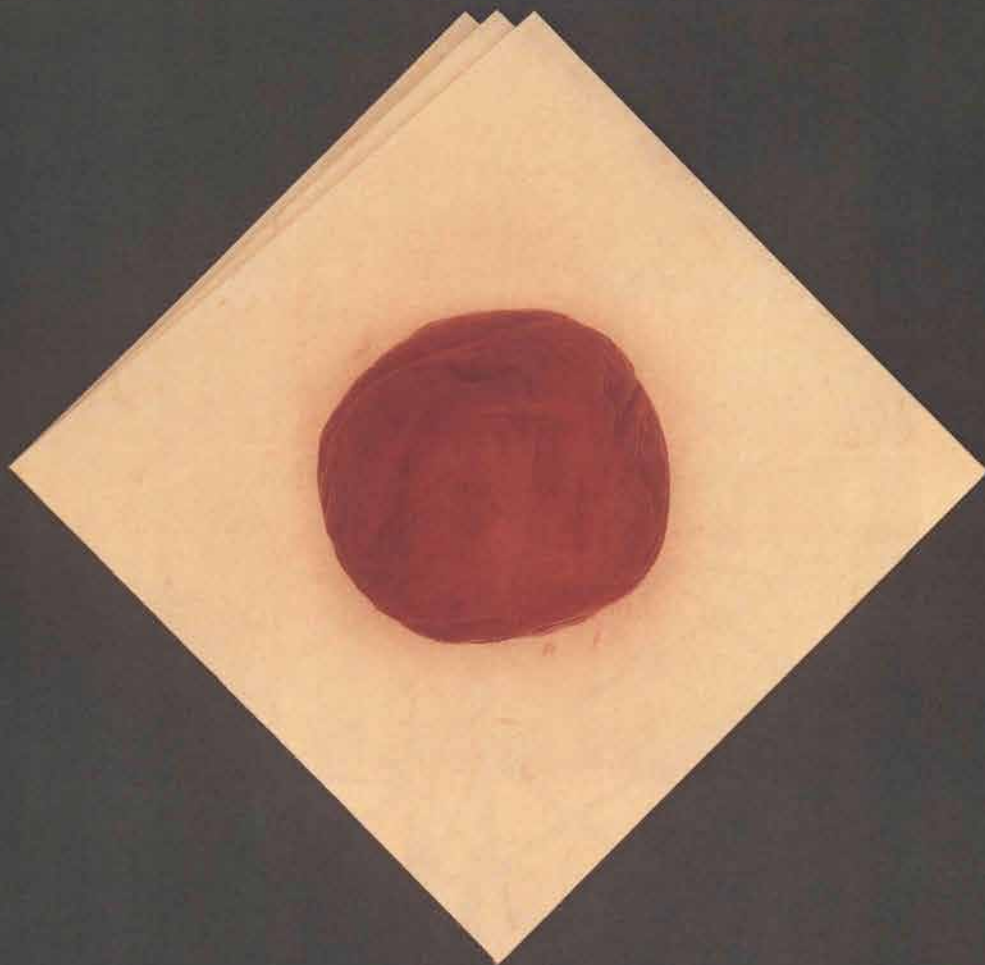
岐阜県大垣市、山岡町
「まちづくり工房大垣」の挑戦
明るく健康な老後に向けて

TBS系、毎週日曜日

午前7時～午前7時30分

※一部放送日時が異なる地域があります。

極上 自慢



日本の海、里、和歌山、
山の極手は極上、そ
れだけであります。
ん、和歌山の自慢は、
底抜けに明るい砂浜
と海の幸、山の幸、立
ちあがる海けむり、清らかな地、
和歌山、山と海を繋ぐ、
心に残る景色があなたをお待ちしています。



和歌山

感動たっぷり紀伊半島

都道府県
漫遊 POSTER GALLERY

和歌山県

静岡県葦山町は、伊豆半島の付け根に位置する町です。

江戸時代には幕府から世襲代官を命ぜられていた江川家が、この地を治めていました。ここには、幕末期の代官、第三十六代江川太郎左衛門英龍（坦庵）が造った反射炉があります。

反射炉とは、金属を溶かし、大砲を鑄造する炉です。嘉永六年（一八五三）に浦賀に来港したペリー艦隊の再来に備え、品川沖のお台場に設置するための大砲をここで造っていました。伊豆石という凝灰岩で囲んだ炉が南炉・北炉の二基あります。内部は、熱を反射させ一点に集中して金属を溶かす構造。レンガを高く積み上げたものは煙突で、その数は百二十五段です。高さは煙突と炉を含め十六メートル。当時、諸大名も反射炉の築造を手がけましたが、今日にこれほど完全な形で残されているのは、この葦山の反射炉だけです。

また、世襲代官だった江川家の邸宅（重要文化財）は、今年三月に改修工事が終わり、一般に公開されています。



お台場の大砲を造った、 反射炉



120年前に洋式の大砲が造られていた反射炉（国指定史跡）と当時の代官屋敷をそのまま伝える江川邸

EVENT CORNER

2月実施イベント

〈日本橋プラザビルイベントスペース〉

2月7日～9日 北条市（愛媛県）＝ふるさと産品市①

〈ふるさと情報プラザイベントスペース〉

2月13日～22日 広島県ほか4県＝観光PR展②

2月26日～3月2日 函館市（北海道）・青森市＝青函観光ポスター展③



■編集後記

▼今回は「逆転の発想」に焦点を当て、まちづくりの実態を探ってみた。財政に余裕があれば行政はいろいろな施策を展開することができるだろう。しかし、国、地方を合わせ巨額の借金を抱える現状ではおのずと限界がある。

事例で紹介した自治体の中には「ないないづくし」に悩みながら、知恵を出し合っていて意外と身近なところに「素材」を見いだしたところが多い。物事には表と裏があり、ちよつと見方を変えればまちおこしのアイデアが浮かぶのではなかろうか。

▼基調原稿で早稲田大学の宮口教授はマインスの状況に価値があると指摘、逆転の発想は「当たり前前の時代」としている。また、過疎地域では、過疎地域対策緊急措置法による地域間格差の是正もさることながら、「カソサカ」十カ条を学ぶべきと記されているが、まさに同感である。

▼巻頭エッセーは片山虎之助・初代総務大臣に寄稿していただいた。自治行政のベテランだけに示唆に富む内容である。政府が打ち出している日本新生を図るには時代に合った地域づくりが根幹を成すといっても過言ではないだろう。分権型社会を築き多きものにするには、地域住民と自治体がどう役割を分担し、手を携えていくにかかっている。（やなぎ）

●編集後記

特集Ⅱ高齢者が生き生き暮らすまち

地域づくり4月号

平成13年3月31日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131代 http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/

印刷＝大日本印刷株式会社



「あなたの夢・未来の街づくり」応援します。



宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人 日本宝くじ協会

当せんはしっかり買って、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。

二科展デザイン部 入選作品
(財)日本宝くじ協会理事長賞
加藤明美

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

地域づくり四月号(通巻142号) 平成十三年三月三十一日 財団法人活性化センター発行